第 19 回　中野区ゆかりの著作者紹介展示

作曲家・中山晋平

～中野で生まれた大衆歌謡～

展示期間：令和４年１１月 26 日(土)～令和５年１月 26 日(木)

中野区立中央図書館

もくじ

はじめに 1

中山晋平 2

相関図 3

晋平の家族 4

書生時代 6

文学青年としての晋平　/　島村抱月と松井須磨子

〇島村抱月　〇牛山充

晋平の音楽 10

作曲家を志す晋平　/　作曲作品について

〇佐藤千夜子　〇平井英子　〇古賀政男　〇本居長世

仕事仲間 16

〇西條八十　〇野口雨情　〇北原白秋　〇相馬御風

〇時雨音羽　〇高野辰之　〇竹久夢二

晋平あれこれ 22

人物評　/　晋平の好物

中野区と晋平～晋平ゆかりの地を訪ねて～ 24

「中野区民奉公歌」募集要項・募集ポスター 30

晩年の晋平 31

年表 32

主要曲年表 39

展示風景 43

展示物 44

ブックリスト 46

中山晋平の音楽を聴く 50

表紙写真：展示風景（職員撮影）

はじめに

中央図書館では、毎年、中野区ゆかりの人物を特集する展示を行っています。今年度の特集は作曲家の中山晋平です。

2022 年で没後 70 周年を迎えた中山晋平は、流行歌の祖と言われ、作曲した楽曲は現在でも様々なアーティストにカバーされ、ドラマや CM などに使われています。

晋平が生まれたのは現在の長野県中野市。江戸時代から中野と呼ばれていた地域です。上京し、人気作曲家になった晋平は、当時中野町と呼ばれていた中野区に居を定めました。記録が残されていないため定かではありませんが、同じ「中野」の土地に、何か故郷への想いがあったのかもしれません。中野区に建てた邸宅は、家屋作りや庭作りに大変熱を入れていたといいます。

しかし戦争で中野区を離れざるを得なくなった晋平は熱海の別荘で没し、当地での記憶は薄れるがままになりました。

本展では、経歴や業績、交流のあった文化人を通して、中野市で生まれ、中野区で曲を生み出した中山晋平の世界を紹介します。中野区での足跡をたどったところ、いくつか資料を発見することもできましたので、ご覧ください。

中山（なかやま） 晋平（しんぺい）

明治 20(1887)年 3 月 22 日～昭和 27(1952)年 12 月 30 日

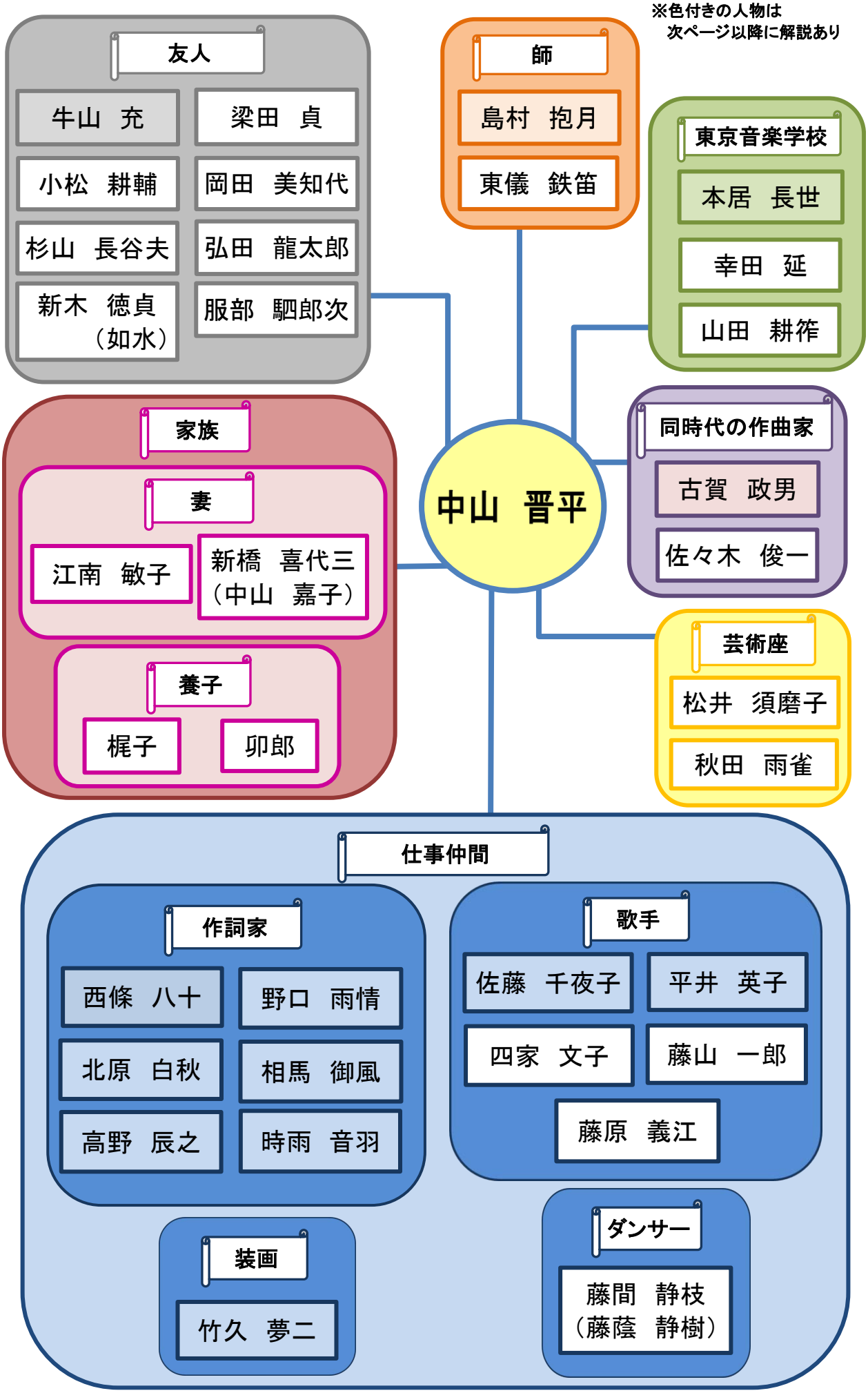
▲ 中山晋平
提供：中山晋平記念館（中野市）

作曲家。長野県下高井郡新野村(現･長野県中野市大字新野)生まれ。郷里で代用教員をした後、明治 38 年に上京し、島村抱月の書生をしながら日本音楽協会の塾や正則英語学校へ通う。41 年東京音楽学校予科(現･東京藝術大学音楽学部)へ入学し、のち本科ピアノ科に進級。45 年卒業。大正 3 年、島村主宰の劇団、芸術座での演目「復活」で女優･松井須磨子が歌う劇中歌「カチューシャの唄」を作曲したことにより、名前が広く知れ渡る。芸術座解散後は、数多くの作詞家と組んで童謡、流行歌、新民謡など、幅広いジャンルの曲を次々に発表。その独自の曲調は“晋平節”と呼ばれ、大衆に愛された。昭和 27 年、熱海の病院で家族にみとられこの世を去る。代表作に「ゴンドラの唄」「てるてる坊主」「あめふり」「証城寺の狸囃子」「船頭小唄」「東京行進曲」「東京音頭」など。享年 65。

晋平は、大正 10 年にそれまで暮らしていた代々幡村(現･渋谷区)から、豊多摩郡中野町大字中野(現･中野区中央 5 丁目)に移り住んだ。その頃の中野は一歩外に出ると蛙の声が聞こえ、田園が広がるのどかな土地であった。その後、昭和 6 年、自宅近くの中野区本町通(現･中央 4 丁目)に、和洋折衷の二階建て住居を新築。普請には多くの情熱を注ぎ、大工、建具屋、植木屋をことこまかに指揮した。作庭にもこだわりが強く、来訪した知人に設計図を示し、「南縁先に大石巨岩を配置しながら、大樹を植えこみ、それに添って池をしつらえ、緋鯉真鯉を放置する…」と熱心に説明した。また晋平は、13 年に中野区民から歌詞を募集した、「中野区民奉公歌」の審査員も務めている。18 年に疎開を兼ねて熱海の別荘に住所を移すまで、晋平はこの中野区の家で多くの名曲を生み出した。

相 関 図

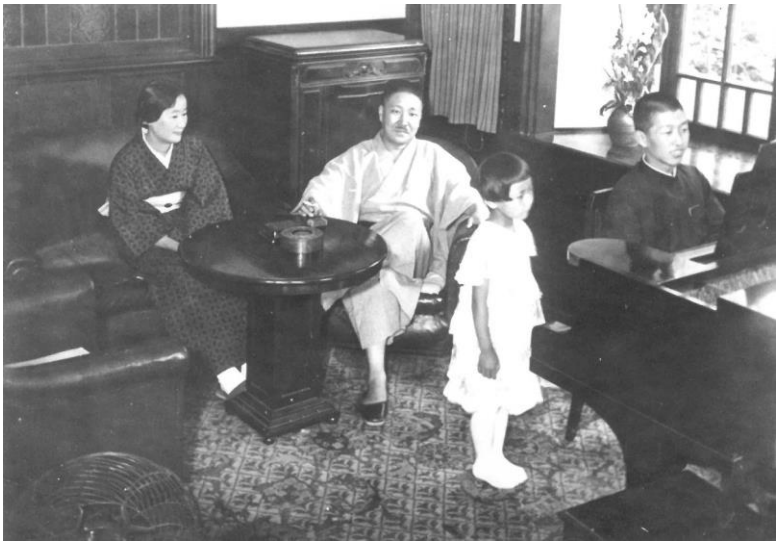
※色付きの人物は
次ページ以降に解説あり



晋 平 の 家 族

晋平の実家は、父･実之助、母･ぞう、次男･明孝(事実上の長男)、三男･隆太、四男･晋平、五男･哲造の 6 人家族(長男･貫蔵は夭逝)である。父は地方自治のために尽力し、文化的教養も高い人物だったが、晋平が小学生の時に病気で他界。小柄ながら芯の強い母が、養蚕や田畑の仕事をしつつ、女手ひとつで中山家を支えた。晋平は尋常小学校卒業後、1 年間の家事手伝いをした後に高等小学校に上がったが、家計の都合で中退。その後、小諸の大和屋呉服店に奉公に出されたものの、1 か月後には仮病を使って実家に戻っている。兄の郡役所勤めの収入が増えたことにより、高等小学校に復学することができ、1 年遅れであったが首席で卒業した。上京後も兄にはたびたび無心の手紙を送り、送金してもらいながら音楽の勉強を続けた。家族からの惜しみない支援によって、晋平は東京でも音楽を続けることができた。

大正 6 年、晋平は江南敏子と結婚。当時は珍しい共働き夫婦で、仲は良好だった。しかし子宝に恵まれず、12 年には養子･卯郎を迎えた。卯郎は敏子が勤めていた赤坂の中之町小学校に通う 2 年生で、父親が前年に 6 人の子どもを残して他界していた。敏子は勤め先の学校を辞め、卯郎の世話をした。その後も昭和 5 年には、晋平の姪である藤井梶子を養女に迎えている。家族仲は円満で、作曲家としての仕事が多忙な晋平にとって、家族と一緒に過ごす時間は、心休まるひとときであった。



▲ 中野の自宅でくつろぐ晋平と家族たち

提供：中山晋平記念館（中野市）

しかし、昭和 11 年、病気がちになっていた妻敏子が 45 歳で他界。琴やオルガンも勉強し、文学にも理解のあった敏子は、家事だけでなく晋平が書いた楽譜を清書するなど、公私ともに晋平を支え続けた。敏子が他界し、しばらくは仕事にも手をつけられない晋平だったが、妻の一周忌が済んだ後、周囲のすすめもあって新橋喜代三(今村タネ)と再婚する。喜代三は仕事で知り合った鹿

児島の芸者で、知り合った当時は喜代治といい、上京したいという喜代治のために、晋平が東京行の世話をした。上京後は喜代三と改名し、一人のレコード歌手として中山家に歌の稽古に通っていた。

喜代三は晋平と結婚した後は芸能界に戻らないと誓約をたて、中山嘉子として最後まで晋平を支えたが、晋平を見送った後、「中山の残した作品を、私のノドに合うものは、生かしていく覚悟」で、再び歌手として芸能界に復帰している。

▲ 自宅の庭にて。卯郎、梶子と。

提供：中山晋平記念館（中野市）

書 生 時 代

文学青年としての晋平

幼い頃は「があたく(わんぱく)坊主」だった晋平だが、成長と共に文学に興味をもつようになっていった。旧友新木徳貞の話によると、高等小学校の時に友人 4 人で文芸同人誌を作り、『精華』という名前をつけて印刷発行していた。当時は『中学文壇』・『文章世界』・『秀才文壇』などの文学雑誌があり、それらの文学雑誌に憧れて作品を送るなど、積極的に活動をしていた。この活動は 3 年ほど続いたという。

また、表紙に「文士日記」とある晋平使用の日記帳には、田山花袋『蒲団』に出てくる女弟子のモデル、岡田美知代と文通していたことが記されている。実家にある楓の大木からつけた「中山かへで」というペンネームで、明治 38 年、晋平は岡田に手紙を出した。「もともと好きな文学(柄にないかも知れませぬが)ではありますが萬事不如意勝ちで勿論投書などハ一度もした事がありませんのですがこれからご教示のもとにボツボツ(無論出来るか出来ぬかわかりゃしませんが)やって見たい考へであります」と、控えめながら文学に関心を抱いていたことが読み取れる。

晋平は『中央公論』(昭和 10 年 8 月号)に寄せた自伝で、東京に行く前の自分を回顧し、「私は蘆花の「自然と人生」や「思ひ出の記」や藤村の「落梅集」に涙をこぼす多感の田舎教師」と、文学に感動する人間として記している。島村抱月の書生になった理由を、「山の生活にも飽きていたんで、アッサリ書生に入りました」としているが、文学者である島村に対する、期待や憧れもあったのではないかと想像できる。

東京音楽学校時代、学友会機関誌『音楽』が創刊された際、晋平は編集者を務めながら、初めての論文「新詩論」を発表した。この頃、島村の書生として第二次『早稲田文学』の編集手伝いもするなど、日常的に文学と深く関わっていた。作曲家になった後、歌詞に筆を入れて作詞家と対話ができたのも、晋平が文学青年として歩んできた素地があればこそだったのだろう。

島村抱月と松井須磨子

明治 42 年、坪内逍遥は自邸を提供し、文芸協会演劇研究所を設立。俳優育成だけでなく、広く演劇学を学ぶという理念を掲げた演劇学校の設立であった。その第一期生に松井須磨子、そして教師陣の中に島村抱月がいた。44 年、帝国劇場にて研究生たちによる「人形の家」が上演されると、主役「ノラ」を演じた松井は女優としての人気と地位を獲得。この頃から二人は恋愛関係になり、その関係が表面化してきたのは、45 年 5 月、ズーダマンの「故郷」上演の頃であった。

師である島村と松井の関係について、島村家の書生であった晋平は備忘録を残している。通称「晋平ノート」と呼ばれ、二人をめぐる当時の様子を、晋平という第三者の視点から垣間見ることができる。この「晋平ノート」は、縦書きの大学ノートに「気の向いたときだけ」と書きつけられ、文学者や音楽家、音楽についての感想や批評も記されている。

▲ 松井須磨子
出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(https://www.ndl.go.jp/portrait/)

大正元年、島村の日ごろの態度に対して猜疑心を抱いていた妻・市子は、晋平に相談を持ち掛ける。晋平は島村の訪問先に、市子と長女・春子は松井の家にと二手に分かれて、それぞれの様子を探りに行った。その際、島村と松井は戸山ヶ原で逢引きする現場を市子に押さえられ、詰問される。取り乱した島村の様子に狼狽し、晋平は「先生に対する尊敬の念をなくすべきであるのか、また以前にも増して崇拝すべきであるかわからない」とノートに綴っている。書生として師匠を尊敬する気持ちと、師匠の行動や発言に対して困惑したり怒ったり疑ったりする、若き晋平の苦悩が窺える。同じころ、島村から松井に宛てた投函前のラブレターを市子が見つけ、晋平はその写しを取るように命じられた。このラブレターの写しが晋平ノートに残っており、島村の松井に対する情熱を感じることができる。

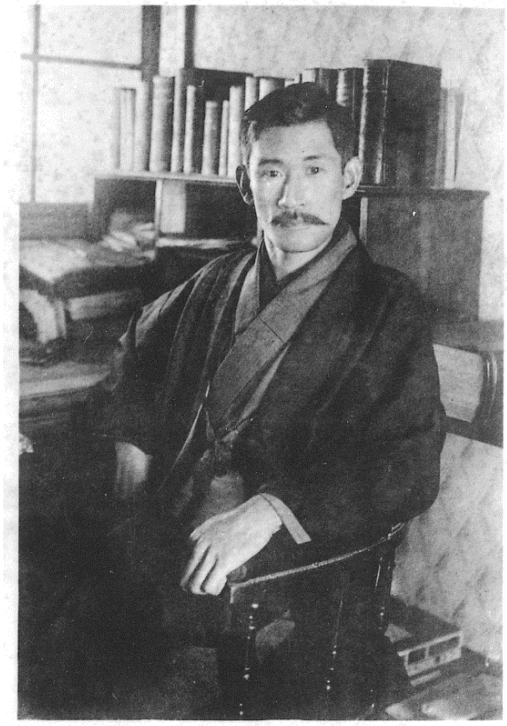
大正 2 年に松井が島村とのスキャンダルを理由に文芸協会から退会処分を受けると、島村

も辞任を申し出る。そして二人を中心とした劇団、芸術座が旗揚げされた。大正3年に「復活」を上演すると、晋平の作曲した劇中歌「カチューシャの唄」がヒット。松井の名はいっそう世に知れ渡り、同時に作曲家中山晋平の名前も世の中に広く知れ渡るようになった。この頃に松井と島村が同棲生活を始めると、晋平は書生をしている理由がなくなり、島村家から離れ一人暮らしを始める。

大正7年、島村がスペイン風邪(インフルエンザ)により松井と同棲していた建物「芸術倶楽部」で死去すると、松井は翌年、月命日に同じく「芸術倶楽部」の物置で自死。遺書を3通ほど書き残しており、全てに「抱月と同じ墓へ」と記されていたが、聞き入れられなかった。

島村 抱月（しまむら ほうげつ）

明治4(1871)年1月10日～大正7年(1918)年11月5日



▲ 島村抱月
出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
(https://www.ndl.go.jp/portrait/)

評論家・小説家・劇作家・演出家。那賀郡小国村（現・島根県浜田市）生まれ。出生名・瀧太郎。明治27年、東京専門学校（現・早稲田大学）卒業。母校の講師をしつつ、雑誌の編集や執筆活動に携わり、35年から3年間イギリス・ドイツに留学。帰国後、早稲田大学の教授として教鞭を執る。39年、坪内逍遥らと文芸協会を創立。第二次『早稲田文学』の主宰も務め、評論「囚はれたる文芸」を発表。自然主義文学運動に大きな影響を与えた。大正2年、文芸協会を辞任し、女優・松井須磨子らと共に芸術座を組織する。以降劇団主宰者・演出家として新劇運動に専念するも、7年スペイン風邪のため死去。享年47。

晋平は、明治39年から約8年間島村抱月の書生を勤めた。島村家の書生になった晋平の最初の仕事は、島村の「囚はれたる文芸」を清書することであった。その後も『早稲田文学』編集などの手伝いを続けるうちに、晋平の字は島村のものに似ていったよ

うで、「終ひには他人が見ると島村先生の字と区別がつき兼ねたとみえて、私の書いた先生の原稿を先生の真筆だと思って大切に保存してゐる何人かの人に会ったことがある」と書生時代を振り返っている。

また、晋平は「先生がつねづね、西洋の真似ばかりして居るのが能ぢゃないだらうから、少し日本の伝統から根の生えたやうなものを、是から拵へるのが君達の仕事ぢゃないかと、言ふことをよく言って聞かされ」たと語っている。「カチューシャの唄」依頼の際も、島村は西洋と日本の中間のような曲にして欲しいと注文をつけたという。晋平の曲の特徴ともいえる西洋風の旋律の中に日本の伝統的な音階が組み込まれたメロディーは、師と仰ぐ島村の考えに大いに影響を受けたものだったことが窺える。

牛山 充（うしやま みつる）

明治 17(1884)年 6 月 12 日～昭和 38(1963)年 11 月 9 日

音楽･舞踊評論家。長野県諏訪郡四賀村(現･諏訪市)生まれ。大正 2 年、東京音楽学校(現･東京藝術大学)師範科卒。在学中は、機関誌『音楽』の主筆･編集長を務めた。卒業後は、母校の講師をしつつ、大正 11 年から朝日新聞にて音楽･舞踊の批評欄を担当。その後も、日本大学芸術学部などの講師を務めながら、音楽評論家としての活動を続ける。また、各種コンクール審査委員や、東京バレエ学校校長なども長年務めた。著書に『音楽鑑賞論』、『洋楽鑑賞の知識』など。享年 79。

牛山と晋平は、日本音楽協会時代に出会い、以後長年の友人であった。牛山は「カチューシャの唄」と同時期に作曲された「春の雨」について、「これは劇中歌でなかったため一般には流行らなかったが、中山君には非常に快心の作で、よく私と一緒に歌いながら散歩したものである」と当時の思い出を語っている。また、当時晋平の作曲した曲は、その新しさゆえか批判されることも多々あった。しかし晋平は、自分の曲を口ずさむ人を見て、「世間で何と云おうと僕は僕の信念で通そうと思う」と牛山に語ったという。牛山は、そういった自分の意志や信念を貫く晋平の人となりを、「同君の芸術の道徳的基調を成すもので、円満、高潔な人格の表れである」と評している。

晋 平 の 音 楽

作曲家を志す晋平

晋平が音楽に目覚めた最初のきっかけは、明治 27 年、小学校に届いたベビー・オルガンだった。当時、唱歌という科目は体育の時間を割いてわずかに教わる程度だったが、このオルガンの音色は晋平の「幼な心へ沁み渡っていった」ようだ。そうして音楽に興味をもった晋平は、近所にある新野神社の祭礼で催される伝統芸能の式三番叟（しきさんばそう）に、笛役として毎年参加した。野良仕事をする合間に笛を吹き、周囲からは「道楽者」と言われてしまうが、この笛の音は素晴らしく、聞く人びとを感心させたという。

さらに、中野小学校高等科 3 年生の時、上田（現・上田市）の町から学校の校庭にやってきたジンタ（小編成の楽隊）の演奏を聴き、晋平の音楽に対する関心は一層高まった。「大小の太鼓にコルネット、クラリネット、トロンボーンくらいの人数も精々五六人で。今から考へるとお粗末極まるものであった」が、華やかな服装で演奏する勇壮な音楽に、「すっかり感激した私は、一生音楽の方面へ進もうと決心の臍（ほぞ）を固めた」と回想している。

明治 36 年、地元の柏尾尋常小学校で 16 歳にして初めて教壇に立つことになると、晋平は唱歌の授業に力を入れた。オルガンの練習をし、身振り手振り、行進などの身体表現を採り入れ、歌は文語調の難しいものは避けて口語に近い優しい歌を意識して採用した。そうした晋平の唱歌の授業は好評で、どんな生徒も晋平の時間は大人しく授業を受けたという。晋平はこの教師時代に、子どもに音楽を楽しんでもらう喜びを知った。

上京後は島村の書生をしながら音楽学校に通っていたが、島村と親交のあった雅楽家であり作曲家でもある東儀鉄笛（とうぎてってき）が書生を探しており、一時島村の元を離れ東儀の書生をしていた時期がある。わずかな期間だったが、作曲家の仕事を間近に見る貴重な日々であった。これらの経験に音楽学校での勉強が加わり、作曲家としての晋平が形成されていくこととなった。

晋平が中野区の家で使っていたピアノ ▸
提供：中山晋平記念館（中野市）

作曲作品について

◆ 流行歌

「復活」の劇中歌「カチューシャの唄」は、晋平が初めて作曲した歌であり、初めての流行歌となった。作曲するに当たり、島村は晋平に「学校の唱歌でもない」「西洋の賛美歌でもない」「日本の伝統的俗謡とリードの中間のような」旋律を、という注文をした。旋律が歌詞に合わずに苦慮したが、歌詞の途中に「ララ」を加えることによって、島村も納得する曲ができあがる。後日、晋平がヘルニアの手術のために入院した際に「カチューシャの唄」を看護婦が歌っているのを聞いて「斯(か)かる特殊な階級が日夕愛誦するための歌を作ることも有意義な仕事の一つであるとベッドの上で熟々考へたものである。或はこれが今日、民謡や童謡以外大衆歌にも筆を染める機縁となったのかも知れない」と回顧し、「歌詞も曲も共に優秀な流行歌を作るということは、その国の音楽文化を向上させることだ」と語っている。晋平は晩年まで「大衆なくして芸術はとても存在し得ないよ」という島村の言葉を胸に、作曲を続けた。

◆ 童謡

日本の音楽教育は明治時代から始まったが、大正時代になっても歌詞は文語体、内容は修身的唱歌や軍人精神を歌ったものが多く、子どもの心情に寄り添ったものではなかった。そこで大正８年、鈴木三重吉が児童雑誌『赤い鳥』を創刊し、もっと子どもたちが親しみを持てるような歌を作ろうと、童話・童謡を新しくする運動が起こった。こうした運動の中で「子どもたちの心を豊かにし、その成長の糧となる良書の出版と普及」を目標にした児童雑誌『金の船』（後に『金の星』に改題）が創刊され、童謡も誌面に掲載されるようになった。

晋平が最初に童謡の作曲をしたのは、相馬御風作詞の「美しい「お早う！」」である。晋平は町で子どもを見かけてはしゃがみこんで遊んであげるほど、子どもへの愛情に溢れていた。自らもラジオで「子どもが非常に好きなんです。好きなもんですから小学校に勤めるようになったわけでして」と語っている。「子どもの歌だけは、できるだけ晴れやかなものでありたい」と、明るくはずんだ調子の曲を多く作曲した。

◆ 民謡

晋平が作曲した民謡は、土地の人が気軽に歌って楽しめる「新民謡」という新たなジャンルを確立させた。その最初の歌である「須坂小唄」は故郷の村に近い須坂町の製糸工場「山丸組」から、女工たちが歌える歌を作って欲しいとの依頼で作曲した。街の風景や工場の内部まで視察し、作曲した「須坂小唄」は各地で評判を呼び、新聞やラジオで紹介されると、ぜひ自分たちの郷里でも小唄を作って欲しいという依頼が相次いだ。晋平は依頼があると、1 曲を作るのに 3 回は現地へ出かけ、その土地に昔からある歌を全部聞き、それらをもとにして自分の歌を練った。こうした新民謡流行のうねりに、晋平以外の作詞･作曲家たちも大いに参加し、多数の新民謡が生まれた。

特に晋平が作曲し、西條八十が作詞した「東京音頭」は、町中の人々が熱狂して踊り明かしたという。

◆ 軍歌

日清･日露戦争の時代、学校音楽の中心は軍歌であった。尋常小学校二年生の時、幼い晋平の心に響いたのはベビー・オルガンから聞こえてくる「豊島の戦」や「勇敢なる水兵」という軍歌であり、晋平は作曲家として大成した後「これらの軍歌によって知らず知らずのうちに音楽に対する憧憬の芽を培われた」と当時を振り返る。

昭和に入り、日本が戦争の道を進む中、晋平は率先して軍に協力する態度は取っていなかったものの、反発はせずに軍当局の意向に沿う歌を作ろうと努力していた。しかし、昭和 20 年、病気がちな養子卯郎のもとに軍の召集令状が届くと、勇ましく戦ってこいと鼓舞するのではなく、「いざとなったら、逃げて帰って来いよな」と伝えている。その様な心根の持ち主である晋平は、戦争協力作品では持ち味を活かせず、ヒット作も生まれなかった。

佐藤（さとう） 千夜子（ちやこ）

明治 30(1897 年 3 月 13 日～昭和 43(1968)年 12 月 13 日

歌手。山形県天童町(現･天童市)生まれ。本名･佐藤千代。地元の教会で、讃美歌を聞いて育った千夜子は、明治 44 年上京し、普連土学園に入学。大正 2 年青山女学院に編入。大正 9 年、憧れであったオペラ歌手を目指して東京音楽学校(現・東京藝術大学)の声楽科に入る。10 年、教会の聖歌隊で歌っているところを中山晋平に見出され、東京音楽学校を中退。以後、晋平らと共に活動し、ラジオ及びレコード歌手の第 1 号となる。「船頭小唄」「波浮の港」「東京行進曲」など数々のヒット曲を歌い一躍人気歌手として脚光を浴びた。また、縁あって当時学生の古賀政男と知り合い、その才能を見出した。しかし、このような成功の中でもオペラ歌手への夢を捨てきれず、昭和 5 年イタリアのミラノに留学。9 年帰国するが、その後オペラ歌手としてのデビューも、歌謡界への復帰も叶わなかった。戦後は家族の援助や生活保護を受けて暮らした。没後、連続テレビ小説『いちばん星』のモデルになった。享年 71。

佐藤は性格が正直で気性に激しいところがあり、少々持て余す部分もあったようだが、晋平にとっては理想の歌手であった。幼少期から東北地方の民謡に触れて育った佐藤の歌唱について、「その歌ひ方に日本在来の歌謡法が加味され、西洋式の歌謡法だけを學んだ人たちに見ることのできない効果を挙げてゐた」と語っている。

平井（ひらい） 英子（ひでこ）

大正 6(1917)年～令和 3(2021)年 2 月 21 日

歌手。東京生まれ。本名･鈴木英。6 歳の時、紹介を受けて中山の家に行き、歌のレッスンを受けるようになった。また、幸田露伴の妹、幸田延（のぶ）にピアノを学んだ。昭和 3 年、日本ビクターに第 1 号専属童謡歌手として入社。「あめふり」「てるてる坊主」「兎のダンス」などを歌い、童謡歌手として活躍するようになる。その活躍ぶりによって、童謡は少女が歌うものという既定路線ができてしまうほどだったという。4 年、二村定一らと共演した童謡歌劇

「茶目子の一日」が大ヒットする。女子学院卒業後、武蔵野音楽学校（現・武蔵野音楽大学）声楽科に入学し、12年卒業。流行歌の歌手としても活躍するが、20代半ばに作曲家・鈴木静一と結婚し、歌手を引退。引退後は一切芸能活動を行わなかった。享年104。

▲ 大正 13 年頃中野橋場町の自宅で。左から雨情・千夜子・藤間静枝と。（左から 2 番目の少女は、恐らく平井英子と思われる）
提供：中山晋平記念館（中野市）

晋平は普段は優しかったが、子どもの躾にはかなり厳しかったようで、平井が演奏旅行で母から教わった通りにお化粧したところ、子どもは決してお化粧などしてはいけない、すぐに洗い落としなさい、と叱られたという。しかし、晋平なりに幼い平井に気を使っていた部分もあったようで、「英子君のきげんが悪いと吹き込みができないので、僕は、彼女の吹き込みの時は、いつもポケットにお菓子を入れておいて、ごきげんをとりとり、吹込みをしたものだった」と人に話している。

古賀（こが） 政男（まさお）

明治37(1904)年11月18日～昭和53(1978)年7月25日

作曲家。福岡県三潴（みづま）郡田口村(現・大川市)生まれ。本名・古賀正夫。中学卒業後は音楽学校への進学を希望していたが叶わず、大阪の兄の元で奉公生活をしていた。大正12年上京し、苦学しながらも明治大学に学び、マンドリン倶楽部に参加。独学で作曲をはじめ、昭和3年、演奏会に招いた佐藤千夜子に処女作「影を慕いて」の楽譜を見せたところ、レコード化を提案され作曲家としての道が開けた。6年日本コロムビアに入社し、専属作曲家となる。「酒は涙か溜息か」などヒット作を次々に生み出し人気作曲家となった。9年テイチクに移籍。引き続き「東京ラプソディ」など数々のヒット作を作曲し、古賀が作曲した曲は“古賀メロディー”と呼ばれるようになった。戦後も、「湯の町エレジー」や「トンコ節」、美空ひばりの

「柔」「悲しい酒」などの名曲を生み出した。33 年、日本作曲家協会を設立し会長となり、日本レコード大賞を制定。日本音楽著作権協会会長や日本ギター演奏家協会会長なども歴任し、歌謡界に貢献した。没後、国民栄誉賞、勲三等瑞宝章を授与された。享年 73。

当時コロムビアは、ビクター所属の晋平への対抗馬として古賀を大々的に宣伝した。古賀は、そのことが心苦しく、ついに晋平へ打ち明けたところ、「気にすることはない。あなたは、私にないいいものを持っているのです。それを大切にしなくてはいけません」と励まされたことが、忘れられない思い出であると語っている。中山も『古賀政男芸術大観』序文で古賀について、「昭和のレコード芸術界に於ける極めて重要なる人物で、数あるレコード作曲家の中でもとっくに私が敬服してゐる人である。(略)自分の作品の上に於いて持ち合はせてゐないもの(即ちそれは私が最も欲しいと思ふもの)を多分に古賀氏が持ってゐられる点に於いて敬服してゐるのである」と語っており、その才能を高く評価している。

本居（もとおり） 長世（ながよ）

明治 18(1885)年 4 月 4 日～昭和 20(1945)年 10 月 14 日

作曲家・ピアニスト。東京市下谷区（現・台東区）生まれ。明治 35 年、東京音楽学校入学、ピアニストの幸田延（のぶ）らに師事した。卒業後、同校助教授となる。その後、西洋の音階と日本のわらべ歌の音階を巧みに取り入れた新しい童謡を雑誌『金の船』（後の『金の星』）などに発表、「七つの子」「赤い靴」「十五夜お月さん」など数多くの作品を手がけた。享年 60。

晋平と本居の出会いは、本居が東京音楽学校で助教授を務めた時の教え子に、晋平がいたことから始まる。後に、晋平が『金の船』編集長の斎藤佐次郎から野口雨情の「葱坊主」という詩の作曲を頼まれた時、直感的に本居の方が合っていると感じ、本居を推薦している。この時の様子を斎藤は次のように語っている。「中山さんのところへ私が足しげく通っておりますと、あるとき「私よりももっと上手な作曲家がおりますよ、わたしの先生のようなひとで民謡音楽を非常に研究していて、今、東京音楽学校の助教授をしています。今度はその人のお歌になさい」と言ってくれたので早速私は本居さんを訪ねました」。本居にとってこの「葱坊主」が初の童謡曲の作曲となり、これを機に本格的に童謡を発表するようになった。

仕 事 仲 間

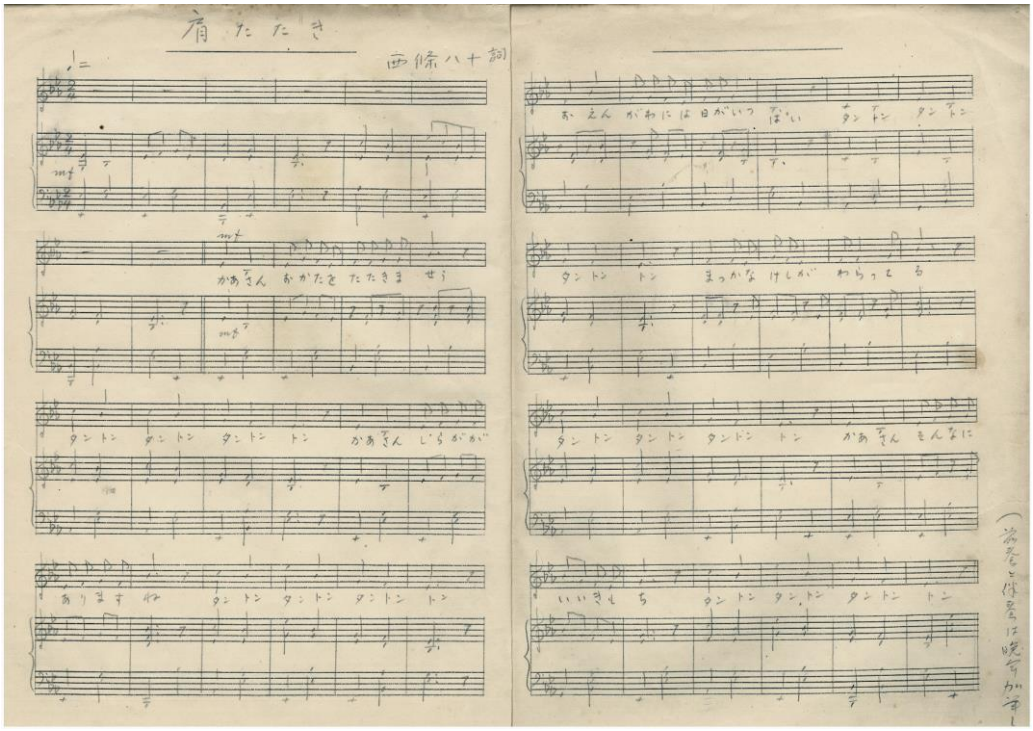
◆ 作詞家

西條（さいじょう） 八十（やそ）

明治 25(1892)年 1 月 15 日～昭和 45(1970)年 8 月 12 日

詩人・作詞家・フランス文学者。東京都牛込区払方町(現・新宿区)生まれ。早稲田大学在学中から『早稲田文学』などに作品を発表。大正 7 年『赤い鳥』創刊に参加し、大正期の童謡詩人として多くの作品を発表した。早稲田大学仏文科助教授を経て、昭和 10 年教授に就任する。また、作詞家としても活躍し、童謡だけでなく歌謡曲や軍歌まで手掛けた。享年 66。

晋平と西條の出会いは、昭和のはじめに西條の「当世銀座節」という詩を見た晋平が、ぜひ作曲したいと西條の家を訪れたことに始まる。実際は、それ以前にも西條の詩に晋平が曲を書いたケースはあったが、親しく話すようになったのはこの時からであった。この時のことを西條は「特に感慨深いのは、この歌を縁として中山晋平氏と識ったことである」と語っている。後に二人で手掛けた作品の数は、晋平がコンビで手掛けたものの中では最多となる 287 編(諸説あり)におよび、童謡「肩たたき」、歌謡曲「東京行進曲」「東京音頭」などの作品を世に残した。また中野区本郷小学校の第一校歌もこの二人が手がけている。



「肩たたき」楽譜 ▸
提供：中山晋平記念館（中野市）

晋平は『新青年』という雑誌で西條のことを「流行唄はもとより地方民謡を書いても、子供の歌を書いても、古典的な歌、モダンな歌、粋な歌、泥くさい歌、何を書いてもそれぞれ急所を衝(つ)いてその歌になり切らせてゐる手ぎはは何と云っても鮮(あざ)やかなものです」と語っている。また、西條は晋平のことを「中山晋平というひとは「おれは島村抱月の玄関番を七年して苦学した。その時分の楽しみは月にただ一度、牛込の焼餅坂の下で、五銭の牛鍋を1ぱい喰うことだけだった」と、自分でよく話すほど苦労を嚙みしめた人で、(略)人情味もあり、義理もよく弁え、実によく出来た人である」と語っている。

野口(のぐち) 雨情(うじょう)

明治15(1882)年5月29日～昭和20(1945)年1月27日

詩人。茨城県多賀郡北中郷村磯原(現・北茨城市磯原町)生まれ。明治40年、相馬御風らと早稲田詩社を結成。同年北海道に渡り、北鳴新聞などいくつかの新聞社勤めを経て帰郷。大正8年から童謡を書き始める。9年上京、キンノツキ社に入社。雑誌『金の船』(後の『金の星』)を中心に、北原白秋、西條八十らと近代童謡の基礎をかため、童謡や地方民謡の創作で活躍した。代表作に「十五夜お月さん」「七つの子」などがある。享年62。

晋平が教師を辞めて作曲家として独立しようかと迷っていたとき、野口に相談すると、野口はきっぱりと「おやめなさい。作曲家でいきなさい」と答えている。また関東大震災のおり、東京・中野の晋平宅は屋根瓦が十数枚落ち、アップライトピアノが壁を突き破り飛び出すほどの被害を受けた。幸い、妻・敏子、養子・卯郎に大事はなかったが、晋平は東京での活動に困難を感じ、野口に関西へ移住する考えを告げている。この時も野口は「なんといっても東京は日本の中心なので必ず復興しますから、東京にいるのがいいでしょう」と励ますように答え、その言葉を受けた晋平は東京に残ることを決めた。生活の資を確保するため晋平は東京府第二中学校に勤めだすが、野口の言葉どおり、その後も作曲の仕事は順調で、学校の方は1年限りで辞めている。

昭和20年、野口が他界すると、晋平は悲しみに暮れるも先頭に立って葬儀を執り行い、井の頭公園に野口の記念碑を建立するために奔走した。二人で手掛けた作品は英語の数え歌

「カムカム･エヴリバディ」の原曲「証城寺の狸囃子」など 198 編(諸説あり)に及ぶ。ちなみに、野口による原詩「証城寺の狸囃子」には「証、証、証城寺」という歌い出しや、「ぽんぽこぽんのぽん」などの言い回しはなかった。この改作は晋平の手によるものであり、本来なら事前に野口の承諾を得る必要があった。しかし野口は旅先のモンゴルにおり、掲載を予定していた雑誌『金の星』の締切は迫っていた。結局、後に帰国した野口は改作を呑み大事には至らないのだが、この時に事後承諾を決心した晋平がおそるおそる編集長斎藤佐次郎のもとを訪れたというエピソードが残されている。

北原(きたはら) 白秋(はくしゅう)

明治 18(1885)年 1 月 25 日～昭和 17(1942)年 11 月 2 日

詩人･童謡作家。福岡県山門郡沖端村大字沖端石場(現･柳川市)生まれ。早稲田大学中退後、明治 39 年に新詩社に入るが 41 年脱退。42 年に詩集『邪宗門』を刊行。以降、詩歌各分野で幅広く活躍する。大正 7 年に創刊された『赤い鳥』では千篇に及ぶ童謡を発表した。生涯の著作は約 200 冊にのぼる。享年 57。

晋平は北原のことを作詞家として西條八十、野口雨情とともに自分にとって「3 人の主人」と評している。しかし北原は晋平が雑誌『小学女生』創刊号に発表した童謡に対して「到底小生には童謡として首肯(しゅこう)しがたく」と批判的な内容の手紙を送るなど作品に対する厳しさを持った性格で、二人の仲は必ずしも親密とはいかなかった。また晋平は曲を作るさい、しばしば歌詞の改作をしていたが、北原の詩に対してはほとんど行っていない。これについて、晋平自身はその理由を明言しておらず、北原の詩に対して一種のおそれを抱いていたとも、その完成度の高さによるものであるとも言われている。いずれにしても二人が手掛けた仕事は「あめふり」「砂山」など 111 編(諸説あり)におよび、これは西條八十、野口雨情に続く 3 番目の多さで、そこには深い信頼関係が窺える。

相馬（そうま） 御風（ぎょふう）

明治 16(1883)年 7 月 10 日～昭和 25(1950)年 5 月 8 日

詩人･評論家。新潟県西頸城郡糸魚川町(現･糸魚川市)生まれ。明治 34 年、中学卒業と同時に新詩社に入るが、36 年脱退。39 年、早稲田大学卒業後に島村抱月のもと『早稲田文学』の編集に従事する。その後野口雨情らと早稲田詩社を設立し、41 年に『御風詩集』を刊行。以降、自然主義文学の詩人･評論家として活躍した。大正 5 年、『還元録』と題する一書を発表したのを最後に、34 歳で第一線から退き糸魚川に隠棲、トルストイや良寛の研究に没頭した。早稲田大学校歌や、童謡「春よ来い」などの作詞で知られる。享年 66。

晋平のデビュー曲となる「カチューシャの唄」(作詞：相馬御風･島村抱月)の作曲を晋平に任せてみてはどうかと島村に進言したのが相馬であった。結果として、この曲のヒットが晋平の名を一躍世に知らしめ、その後も晋平は作曲家としてのキャリアを順調に築いていった。相馬が糸魚川に隠棲してからも、晋平との親交は続き、二人で民謡や小唄、校歌など数多くの作品を手掛けている。特に校歌は晋平が作曲した全 64 曲のうち、43 曲を相馬が作詞している。

◂ **「カチューシャの唄」楽譜**
提供：中山晋平記念館（中野市）

時雨（しぐれ） 音羽（おとは）

明治 32(1899)年 3 月 19 日～昭和 55(1980)年 7 月 25 日

作詞家･詩人。北海道利尻島生まれ。大蔵省(現･財務省)主税局勤務の傍らに詩を書き、後に作詞家として数多くの歌謡曲を手掛けた。戦前にヒットした「君恋し」は、戦後のリバイバルブームで、昭和 36 年にレコード大賞を受賞している。享年 81。

大正 13 年、大蔵省に勤めていた時雨のもとに講談社の『キング』という大衆雑誌から、創刊の企画で詩の作成が依頼された。このとき作成期間わずか 1 週間で作られた「朝日をあ

びて」(後に「出船の港」に改題)に晋平が作曲し、世間で大きな反響を呼んだ。これを受けて翌年にも同雑誌からの依頼で「金扇」(後に「鉾をおさめて」に改題)を作成、こちらも晋平が作曲を担当し、人気を博した。晋平はその時の様子をリズミカルな調子のよい歌詞を見て大いに乗り気になり、一気に曲を書き上げましたと語っている。時雨はこれを機に、作詞家としての道を本格的に歩み始め、後に大蔵省を退職しビクターの専属詩人第 1 号となった。

「出船の港」と「鉾をおさめて」は歌手の藤原義江が歌いヒットしたが、藤原が「出船の港」の「ドンとドンと波のり超して」と言う歌詞を、「波乗り越えて」と歌いレコードに吹き込んだことで、時雨の故郷に建った石碑の歌詞には「波乗り越えて」と刻まれることになった。このことについて時雨は便りで藤原に「今や全国的に＜…波のり越えて＞とおぼえられてしまっていますから、やはりあなたが歌われたように、＜越えて＞と刻ませました」と伝えている。

高野（たかの） 辰之（たつゆき）

明治 9(1876)年 4 月 13 日～昭和 22(1947)年 1 月 25 日

国文学者･作詞家。長野県下水内郡永江村(現･中野市)生まれ。長野師範学校教師を 2 年で辞し上京。明治 35 年に文部省小学唱歌教科書編纂委員、同 43 年東京音楽学校教授、大正 15 年東京帝国大学文学部講師などを務めた。「春の小川」「朧月夜」など文部省唱歌の作詞家としても知られ、特に校歌の作詞は全国 100 校以上に及ぶ。享年 70。

高野は東京音楽学校で「日本歌謡史」の講義を担当しており、その時の教え子の中に晋平がいた。高野は音楽学校時代、自宅によく学生を招いており、同郷の晋平とも親交が深かった。その関係は卒業後も続き、大正 7 年、所帯をもった晋平が東京郊外の代々幡村(現･渋谷区)に越しているが、そこから 50m ほどの距離には高野が居をかまえていた。後に高野は晋平のデビュー作となった「カチューシャの唄」を、こうした歌が生まれたのは時代の必然と評しており、また昭和の新民謡ブームのおりには「飯山小唄」などを晋平とのコンビで手掛けている。

◆ 楽譜装幀

竹久（たけひさ） 夢二（ゆめじ）

明治 17(1884)年 9 月 16 日～昭和 9(1934)年 9 月 1 日

画家・詩人。岡山県邑久郡本庄村(現・瀬戸内市)生まれ。明治 35 年に早稲田実業学校本科に入学。38 年に卒業して専攻科に進学するが、4 カ月で中退した。一時文学の道を目指すが、絵画に転身、藤島武二の作品に憧れ、号を夢二とする。平民新聞の諷刺画で知られ、24 歳で結婚した最初の妻、たまきなどをモデルに眼の大きな女性を描き、夢二の美人画として一世を風靡した。享年 49。

晋平と竹久は、島村抱月との縁を通じて接点が生まれる。竹久は晋平の作曲した「カチューシャの唄」や「ゴンドラの唄」などの楽譜の装幀画を手掛けた。しかし大正 8 年、「さすらいの唄」をめぐり、作詞した北原白秋と作曲した晋平、この唄の小冊子を発行したアルス書店主の 3 人が、「唄と譜とを作者に無断で絵葉書に刷り込み販売した」として、絵葉書を発行したツルヤ画房の主人と竹久を相手に裁判を起こした。最後は双方が折れる形で「お互いに笑顔を作って」裁判は終了したが、裁判が終わったのは同 11 年で、4 年にも及んだ。

竹久は「中山や北原と握手してくれ」、「中山は大へんすまないと思って悔いているのだからどこかで逢ってくれ」という野口雨情の仲介により、晋平と夕飯を食べたりしている。晋平のことを「イヤな男」と日記に書くなど、一時期不仲になったと思われるが、その後も晋平と竹久の交流は続き、竹久の家「少年山荘」に晋平が訪れることもあった。昭和 5 年に出版された『中山晋平作曲全集』でも竹久が装幀を手掛けている。

◂ 「ゴンドラの唄」楽譜
提供：中山晋平記念館（中野市）

晋 平 あ れ こ れ

人物評

中山さんは責任感の強い、人間としての常識と義理人情というものをりっぱに兼ね備えたかたでしたね。元来自分に対しては非常にけちんぼうです。洋服なんかもいつも同じものを着ていながら、人につくすところは実におどろくばかりです。
いびきの大きなのは有名で、自分から遠慮して必ず別の部屋へ行って寝る。

作詞家　西條八十

中山氏は生気のままの飾りのない野人的天才で、音楽著作権協会が中山氏を会長に推したのも、万人に好かれるその人柄によるものだと思う。

音楽評論家　堀内敬三

中山さんは和服の着流しで、鼻の下にちょびひげはあったが、福徳円満の相があり、実におだやかな人という感じであった。

作曲家　井上武士

人格者で人をうたがうことがなかっただけに、人にだまされやすい反面もありました。

作曲家　佐々木すぐる

少しもいばらず、人と争わず、芸術論をしたことがないというのも庶民的な音楽の母としての中山先生の面目が躍如としているようだ。

詩人　門田ゆたか

いつもおだやかで、喜怒哀楽を激しく表面に出さないで、しかも信州人らしいねばり強さで、コツコツと仕事をされていた先生。
正義感にあふれ、絶対的に信頼のできる人物でした。

声楽家　四家文子

寡言実行型の人で、大言壮語とは縁がなく平常は控え目だが、困った時に頼りになる人で、知人が窮した時や、団体が窮地に陥った時、人々がお手上げすると「では、なんとか」と言ってうまく救ってしまう。

音楽評論家　宮沢縦一

子ども好きの先生ですから、あんなにたくさんの童謡傑作が生まれたのでしょう。

舞踊家　島田豊

中山さんは何十年に一度しか出現しない作曲家だと思う。大衆の心をあれほどよくつかみ、あれほどよく表現した作曲家も珍しい。

詩人　時雨音羽

写真提供：中山晋平記念館（中野市）

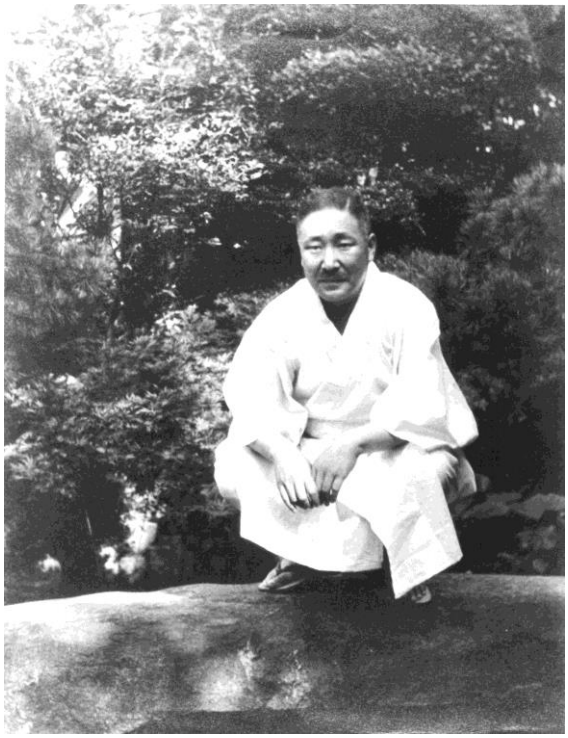
晋平の好物

晋平は、洋服を着て牛肉を食べ、書や小唄ができ、酒も飲めた父親の性格、酒が大嫌いで辛抱強く勤勉な母親の性格、その二つが「同棲していてそれが互いにせめいで相反発し抗争し合っている」状態が自分の性格だとしている。

晋平は母親譲りで酒が飲めず、後年には自然と酒の席から遠ざかった。また、何十年にわたってお茶、コーヒー、紅茶類を飲まず、白湯だけ飲んでいたという。これは、睡眠不足に悩まされていた晋平が、カフェインの摂取を避けるためのこだわりだったようだ。

食事の好みとしては、「海の近いところに住んでいても、魚は全然だめで、好きなものと言えば葱の味噌汁、豆類など山の幸ばかり、ときどき味噌漬や野沢菜のお漬物が届くと、まるで子供のように喜んで、家じゅうの者に、貴重品扱いさせては自慢の種にしておりました」と娘の梶子が語っている。また、息子の卯郎も晋平の好みについて記している。晋平の好物の中で一番印象に残ったものはうどんだった。町でうどん玉を買ってきて、家で煮込む。晋平は口癖のように「うどんの正体がなくなるように」と注文をつけ、とろとろに煮たうどんを気に入って食べていた。その次は黒豆で、醤油でコトコト煮込み、噛むと歯が痛むくらい堅くしてしまったのが良かったようだ。また味噌というものに郷愁を感じていたのか、愛着が強く、食べ飽きたおかずが出た時などは、なま味噌を白米にぬってそれを食べていたという。

食べ物の他に嗜好品と言えばたばこであった。「朝日」という口つきたばこ 20 本入りを晩年まで愛用。晋平の部屋はいつもたばこの煙で曇っていたという。



晋平　中野の自宅にて ▸
提供：中山晋平記念館（中野市）

中野区と晋平

～晋平ゆかりの地を訪ねて～

大正時代の中野周辺の田園 ▸
提供：中野区

①【中野の日本音楽学校】

「音楽をやるにはどうしても上野の東京音楽学校へはいらねば駄目だと考えていた」晋平は、受験勉強のため、当時神田にあった「日本音楽協会」に通った。なお、晋平の終生の親友となった牛山充も受講生の一人だった。

この日本音楽協会とは、明治 36 年に山田源一郎により、日本初の私立音楽学校「音楽遊戯協会」として創立され、明治 39 年に女子音楽学校と、日本音楽協会に分かれたものである。晋平が通った当時は神田にあったが、大正 12 年に中野の打越(現・中野 5 丁目 26 番)に移転し「日本音楽学校」と改名、東京音楽学校で同期だった友人、服部駟郎次(はっとりしろうじ)がピアノの教鞭を執っている。その後昭和 22 年に中野から品川に移転した後、関連校も増え、いくつかの名前に分かれている。

なお、当時校舎があった場所には、現在指定障害者支援施設が建っている。

▲ 大正時代の中野駅　　提供：中野区

②【晋平 中野の家】

大正 10 年 10 月、東京府下豊多摩郡中野町大字中野 3508(現・中央 5 丁目 38 番)に、資金面から結婚当初は断念した、念願のマイホームを建てた。広さは約 20 坪(約 66 ㎡)で、辺りは蛙の鳴く声が絶えない田園だったが、徒歩 10 分ほどの距離に中野駅があった。晋平の仕事部屋には、当時としては新しい手回しの蓄音機が置いてあった。後に息子の卯郎は、どことなく西洋くさく、たばこのヤニ臭いその部屋を「西洋間」と呼んでいたと語っている。この西洋間から「証城寺の狸囃子」や「あめふり」「シャボン玉」など、数々の名曲が生まれた。

▲ 現在の風景

③【晋平 中野の豪邸】

昭和 6 年、当時住んでいた家から、約 200m 離れた中野区本町通 5 丁目 14 番(現・中央 4 丁目 6 番)の、484 坪(1600 ㎡)の空き地に、広さ約 64 坪(210 ㎡)の 2 階建てを、それまでに蓄えた資金のほとんどを注ぎ込んで新築した。自ら設計した家は、建材が吟味されたのは勿論のこと、ピアノを置く関係で、仕事部屋を洋間にした以外は日本風であった。庭の草木もバラのような西洋風のものは一切うけつけず、甲府近辺から巨石を取寄せて配置するなど、純日本風にしつらえられた。建築中には、自身も暇を見ては地下足袋をはいて、大工や植木屋に混ざって走り回り、細々と指図していたほどの執心ぶりだった。9 月に完成して移り住むと、近所の人々は「東京行進曲」の印税で出来た邸だと噂した。

▲ 現在の風景
昭和 45 年の住宅地図を見ると既に、現在と同じ新中野マンションが建っている。

この家には昭和 18 年、熱海に疎開を兼ねて移るまで住み続け、終戦後の昭和 22 年、財産税の懸念などから、全音楽譜出版の社長に譲ることになった。その後、買主がすぐには引っ越せない事情があったらしく、晋平とともに著作権協会に勤めていた、佐々木すぐる一家が 1 年ほど住んでいた。現在では買主の手からも離れ、マンションが建っている。

中野区の邸宅 ▸
提供：中山晋平記念館（中野市）

④【中野区立中野本郷小学校】

昭和 3 年、作詞家西條八十と組んで東京府豊多摩郡本郷尋常小学校（現・中野区立中野本郷小学校）の校歌を作曲した。現在の本郷小学校では、昭和 23 年に制定された曲を校歌としているが、開校当初の校歌として、『本郷　中野区立中野本郷小学校創立 50 周年記念誌』などいくつかの資料に「第一校歌」の名で残されている。本郷小学校は、現在も当時と同じ場所で子どもたちを迎え入れており、平成 20 年に行われた本郷小学校開校 80 周年の記念式典では、当時の 6 年生が晋平作曲の第一校歌を披露した。

◂▸ 現在の風景

⑤【宝仙学園】

この学校の経営にあたる宝仙寺の住職は、晋平と同じ長野県の出身だった。そんな関係からか、昭和 4 年に「いろはうた」をこの学校のために作曲している。また昭和 9 年には、真言宗の開祖弘法大師 1100 年御遠忌の記念として、宝仙寺が経営する感応幼稚園（現・宝仙学園幼稚園）の園歌も作曲した。この園歌は、西条八十が詞を付け、園歌として名曲であると

専門家にも推賞されてきた。園名が変わった現在でも 2・3 番が歌い続けられている。

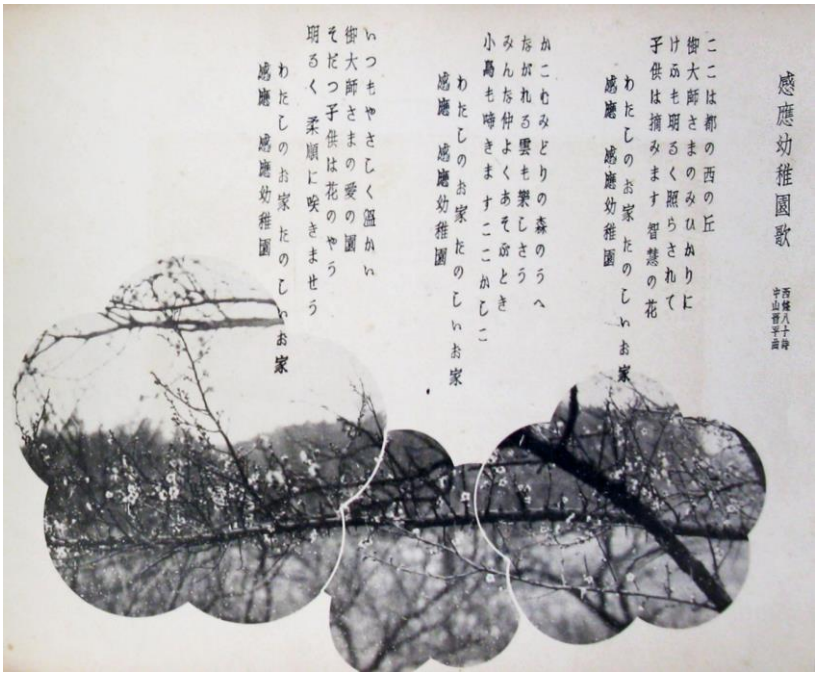
また昭和 14 年には、娘の梶子が系列である中野高等女学校（現・宝仙学園中学校）に入学した。

当時の感応幼稚園と、
現在の宝仙学園幼稚園

提供：宝仙学園

当時の中野高等女学校と、
現在の宝仙学園中学校

提供：宝仙学園



感應幼稚園歌

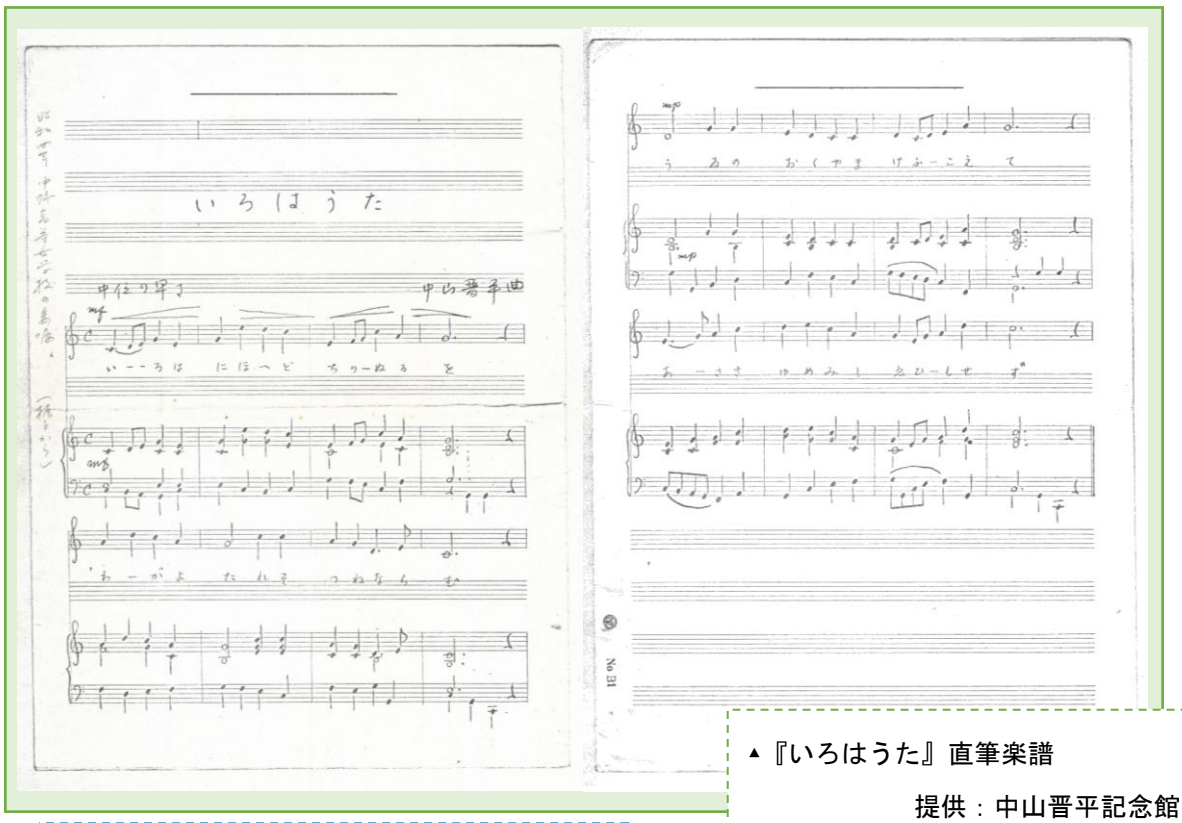
西條八十作詞
中山晋平作曲

ここは都の西の丘
御大師さまのみひかりに
けふも明るく照らされて
子供は摘みます 智慧の花
わたしのお家たのしいお家
感應 感應幼稚園

かこむみどりの森のうへ
なびれる雲も樂しさう
みんな仲よくあそぶとき
小鳥も時きますここかしこ
わたしのお家たのしいお家
感應 感應幼稚園

いつもやさしく温かい
御大師さまの愛の園
そだつ子供は花のやう
明るく 柔順に咲きませう
わたしのお家たのしいお家
感應 感應幼稚園

◂ 感応幼稚園歌
提供：宝仙学園



▲『いろはうた』直筆楽譜

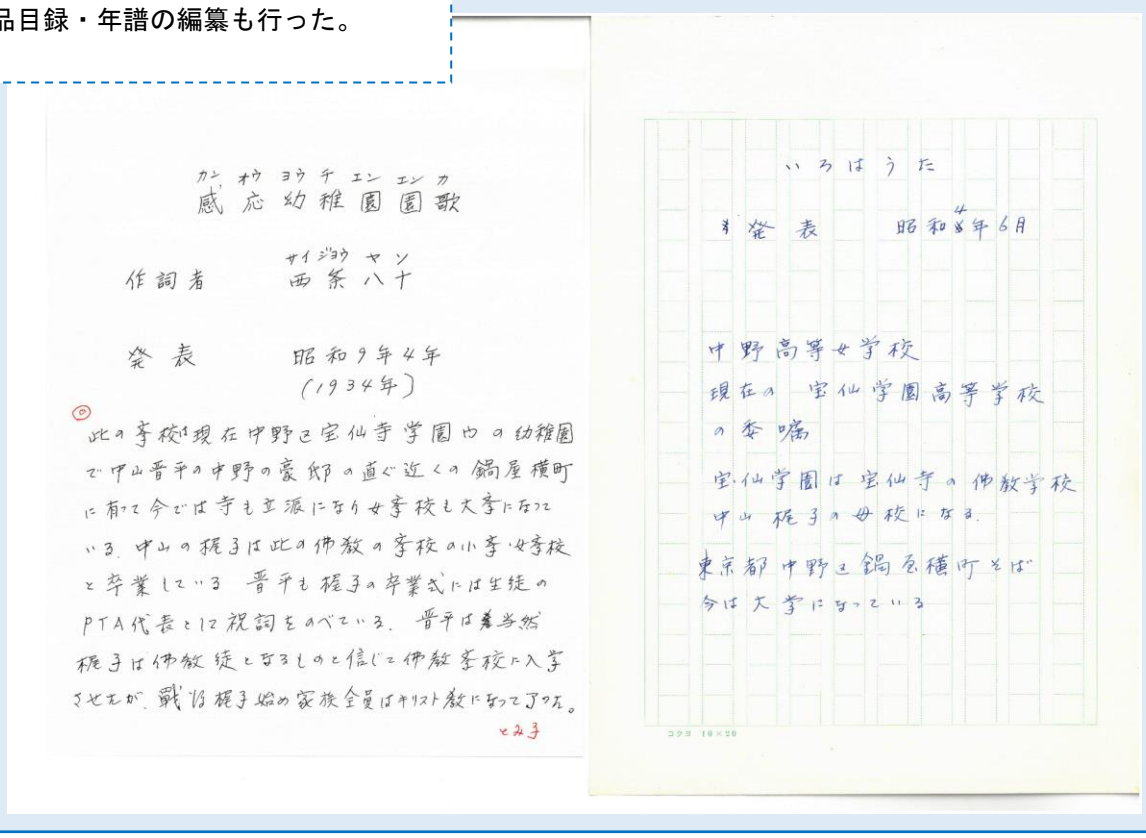
提供：中山晋平記念館（中野市）

中野高等女学校（現・宝仙学園中学・高等学校）の委嘱で作った曲。現在の宝仙学園には伝わっておらず、どんな意図で作られた曲であるかは謎である。同学園の幼稚園のために作られた園歌は現在も歌われている。

▼ 親族による解説

提供：中山晋平記念館（中野市）

晋平の息子･卯郎の妻である中山富子による解説。ここでは「とみ子」と自署している。
夫婦ともに作曲の方法や、曲の裏話等、家族ならではの晋平エピソードを残しており､卯郎は晋平の作品目録・年譜の編纂も行った。


感応幼稚園園歌

作詞者　西条八十

発表　昭和9年4年（1934年）

此の学校は現在中野と宝仙寺学園内の幼稚園で中山晋平の中野の豪邸の直ぐ近くの鍋屋横町に有って今では寺も立派になり女学校も大学になっている。中山の梶子は此の仏教の学校の小学･女学校と卒業している。晋平も梶子の卒業式には生徒のPTA代表として祝詞をのべている。晋平は当然梶子は仏教徒となるものと信じて仏教学校に入学させたが、戦後梶子始め家族全員はキリスト教になって了った。

とみ子

いろはうた

発表　昭和4年6月

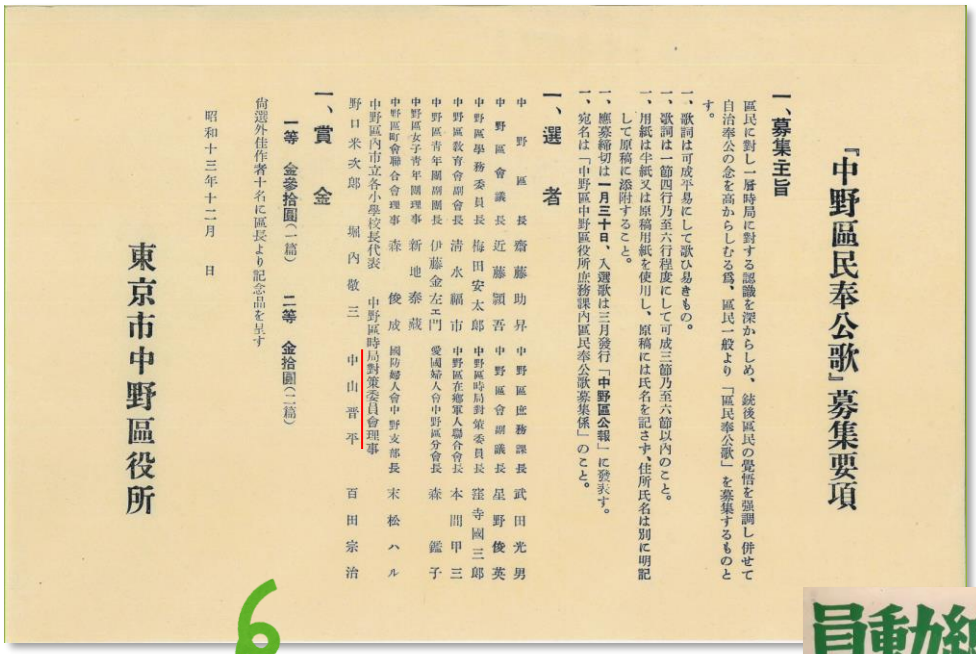
中野高等女学校
現在の　宝仙学園高等学校
の委嘱

宝仙学園は宝仙寺の仏教学校
中山梶子の母校になる。

東京都中野と鍋屋横町そば
今は大学になっている

「中野区民奉公歌」募集要項・募集ポスター

『中野区史　昭和資料編 1』の 75 ページ、元区議会議員による対談の中で、「中野区民奉公歌」の作曲を中山晋平に委嘱したと書いてある。そこで中野区立歴史民俗資料館へ問い合わせたところ、募集ポスターと、晋平の名のある募集要項を所蔵していた。岩崎という人物の詞が当選して曲が作られたようだが、歌詞や楽譜などは現在発見できておらず、幻の曲となっている。ポスターからは戦時色が濃く窺える。



『中野區民奉公歌』募集要項

一、募集主旨

區民に對し一層時局に對する認識を深からしめ、銃後區民の覺悟を强調し併せて自治奉公の念を高からしむる爲、區民一般より「區民奉公歌」を募集するものとす。

一、歌詞は可成平易にして歌ひ易きもの。

一、歌詞は一節四行乃至六行程度にして可成三節乃至六節以内のこと。

一、用紙は半紙又は原稿用紙を使用し、原稿には氏名を記さず、住所氏名は別に明記して原稿に添附すること。

一、應募締切は一月三十日、入選歌は三月發行「中野區公報」に發表す。

一、宛名は「中野區中野區役所庶務課内區民奉公歌募集係」のこと。

一、選　者

中　野　區　長　齋藤助昇　中野區庶務課長　武田光男
中野區會議長　近藤觀吾　中野區會副議長　星野俊英
中野區學務委員長　梅田安太郎　中野區時局對策委員長　窪寺國三郎
中野區教育會副會長　清水福市　中野區在郷軍人團會長　本間甲三
中野區青年團團長　伊藤金左エ門　愛國婦人會中野區分會長　森　鑑子
中野區女子青年團理事　新地泰藏
中野區町會聯合會理事　森　俊成　國防婦人會中野支部長　末松ハル
中野區内市立各小學校長代表　中野區時局對策委員會理事　中山晋平
野口米次郎　堀内敬三　百田宗治

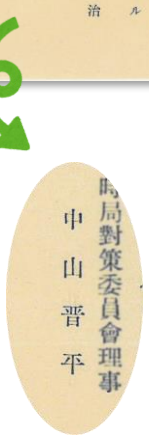
一、賞　金

一等　金參拾圓（一篇）　二等　金拾圓（二篇）

尙選外佳作者十名に區長より記念品を呈す

昭和十三年十二月　日

東京市中野區役所



時局對策委員會理事
中山晋平

國民精神總動員
中野區民奉公歌募集
堅忍持久
奮ッテ應募セラレタシ
◎募集要項
一、歌詞内容＝國民精神總動員ノ趣旨ニ則リ時局ニ對スル認識ヲ深メ銃後國民ノ覺悟ヲ示シ自治奉公ノ念ヲ强調セルモノ
一、平易ニシテ歌ヒ易キモノ一節六行、六節以内
一、〆切＝一月廿日、四月發表發行中野區公報
一、賞金＝一等參拾圓、二等拾圓、佳作十名呈賞
一、宛名＝『東京市中野區役所内聯奉公歌募集係』

提供：中野区立歴史民俗資料館

晩 年 の 晋 平

昭和 12 年、晋平 50 歳の年になると戦時色は徐々に濃くなっていった。晋平も、時代の流れにあえて逆らうことはなく、軍の意に沿うような曲を作ろうと努めたが、晋平の得意とする曲調は、求められている曲調とはギャップがあり、うまく能力を発揮することができなかったようだ。この頃から作曲以外に、日本の音楽業界全体にまつわる仕事にも深く携わるようになっていく。特に「大日本音楽著作権協会」の理事長に就任すると、業界の著作権に関する意識向上や発展に大きく貢献した。

戦況が悪化すると、晋平は中野区から熱海にあった別荘に居を移す。この頃になると、社会情勢や諸々の事情によりほぼ作曲の仕事はしなくなり、著作権協会などの仕事のため東京に赴く他は、家の近くの土地を借りて畑いじりに精を出した。

戦後晋平は再び作曲を始めるが、以前の作曲の感覚を取り戻すことが出来ず、歌謡曲や童謡についてはヒット曲をだすことはなかった。校歌や社歌、新民謡には引き続き依頼があった。晋平が東京音楽学校を卒業した後、初めて勤めた千束小学校の校歌の依頼があった際は、喜んで引き受け、辞退した作曲料の代わりに学校から贈られた置時計を、居間に飾って嬉しそうにしていたというエピソードが残っている。

人一倍健康に気を使って、様々な健康法を試していた晋平だが、昭和 27 年、戦中から続いた趣味の畑いじりが出来なくなると途端に臥せることが多くなり、その年の 12 月に体調が急変、膵臓炎で帰らぬ人となった。その死に顔は穏やかで、かすかに微笑んでいるように見えたという。

▲ 熱海の別荘　移築され現在は中山晋平記念館となっている。

提供：中山晋平記念館（熱海市）

年 表

※時期が分からない事項に関しては、列の先頭に集約した。

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1887年 (明治20年)	3月 22日、長野県下高井郡新野村36番地(現・中野市大字新野65番地)に父実之助、母ぞうの四男として生まれる。		0歳
1889年 (明治22年)	弟哲造生まれる。	大日本帝国憲法発布。	2歳
1890年 (明治23年)	長兄貫蔵死去。	教育勅語発布。 我が国最初の洋楽雑誌『音楽雑誌』出版。	3歳
1893年 (明治26年)	4月 下高井郡村立日野尋常小学校入学。 7月 父実之助死去。	伊沢修二編『小学唱歌』六編出版。 文部省編『祝祭日唱歌集』出版。	6歳
1894年 (明治27年)	小学校に備え付けられたベビー・オルガンにふれ、音楽に対する憧れと熱意を抱く。	日清戦争勃発。	7歳
1897年 (明治30年)	3月 村立日野尋常小学校卒業、家事を手伝う。	師範教育令公布。	10歳
1898年 (明治31年)	4月 下高井郡村立下高井高等小学校(現・中野市立中野小学校)入学。		11歳
1899年 (明治32年)	5月 北佐久間郡(現・小諸市)小諸町の大和屋呉服店へ見習奉公。1か月後ホームシックにかかり、病気を偽り帰宅。 10月 同校2学年に編入する。	「さのさ節」が流行する。	12歳
1900年 (明治33年)	学校で行われた赤十字の地方部会でのジンタを聞き、音楽の方面へ進む決心を固める。(ジンタは、明治時代中期の日本に生まれた民間オーケストラ「市中音楽隊」の愛称。)	納所弁次郎、田村虎藏編『幼年唱歌』初編上巻出版され、「モモタロウ」など言文一致の唱歌が発表される。 「東雲節」「鉄道唱歌」が流行する。	13歳
1902年 (明治35年)	在学中から友人と同人誌『精華』を発行。「中山かへで」のペンネームで作文などを執筆する。 3月 下高井高等小学校卒業。	日英同盟成立。	15歳
1903年 (明治36年)	4月 長野県師範学校講習科第三種の受講を始める。 9月 下高井郡瑞穂村(現・飯山市内)柏尾小学校の代用教員となる。2か月後、退職。 12月 長野県管内尋常小学校准教員の免許を受ける。	作曲家の滝廉太郎死去。 日本独自の蓄音機「フィルモン」が発売される。	16歳
1904年 (明治37年)	1月 下高井郡中野尋常小学校の代用教員となる。 7月 同郡延徳尋常小学校の代用教員となる。	日露戦争勃発。	17歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1905年 (明治38年)	1月 師範学校入学試験を受けるが不合格。 11月 延徳尋常小学校の教職を辞職。 12月 東京で、文芸評論家・劇作家の島村抱月の書生となる。	島村抱月留学から帰国。 竹久夢二の美人画、人気高まる。 「戦友」「ラッパ節」が流行する。	18歳
1906年 (明治39年)	4月 抱月の勧めで音楽の勉強を兼ねて、雅楽家・作曲家の東儀鉄笛家へ移る。	『早稲田文学』抱月を主筆として復刊。 小説家の坪内逍遥、文芸協会を創設し、第1回公演で逍遙作、東儀鉄笛作曲、歌劇「常闇」などを上演。	19歳
1907年 (明治40年)	再び島村家へ戻り、東京音楽学校受験のため、日本音楽協会で受験に必要な講義を受講。 5月 軽い斜視により兵役免除となる。	小学校令改正、義務教育6年制となる。	20歳
1908年 (明治41年)	4月 東京音楽学校予科(現・東京藝術大学)に入学。	詩人・童謡作家の北原白秋、詩人の木下杢太郎らが青年文芸・美術家の懇談会「パンの会」を結成。	21歳
1909年 (明治42年)	4月 同校本科ピアノ科に進む。ピアノ教師は橘糸重、幸田延。	文芸協会演劇研究所が、研究生に松井須磨子ら15名を採用。	22歳
1910年 (明治43年)	1月 同校が教官吉丸一昌、乙骨三郎を主任として学友会雑誌『音楽』を創刊。牛山充と編集を担当する。 「新詩論」を執筆する。	文部省編『尋常小学校讀本唱歌』出版。文部省唱歌の誕生。 日本蓄音器商会(のちの日本コロムビア)設立。	23歳
1911年 (明治44年)	『音楽』の評論欄「低唱微吟」に評論を執筆する。	文部省編『尋常小学唱歌』(春の小川など)第1巻出版。 文芸協会試演会で、松井須磨子、好評を得る。 レコード、蓄音機が普及し始める。	24歳
1912年 (明治45年/ 大正1年)	3月 同校ピアノ科卒業。 東京市浅草区千束小学校音楽専科教員となる。	明治天皇崩御。 島村抱月、松井須磨子恋愛事件起こる。	25歳
1913年 (大正2年)	10月 芸術座音楽会同人として「芸術座音楽会」を有楽座で開催する。	坪内逍遥、文芸協会を解散する。 抱月・須磨子、芸術座を創設する。	26歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1914年 (大正3年)	3月 作曲家としてのデビュー曲となる、「復活」の劇中歌「カチューシャの唄」を作曲する。 6月 「カチューシャの唄」の楽譜を早稲田の敬文堂書店から出版。表紙画は竹久夢二に依頼。 10月 島村家を出て、巣鴨の宮仲町2241番地(現・豊島区)の借家に移る。郷里から母を呼び寄せる。	芸術座第3回公演トルストイ作「復活」好評、関西でも成功し、劇中歌が流行する。 第一次世界大戦勃発。	27歳
1915年 (大正4年)	1月 母帰郷。 4月 母郷里で死去。 「その前夜」劇中歌「ゴンドラの唄」を作曲する。	芸術座第5回公演ツルゲーネフ作「その前夜」上演。 このころ偽作レコードが多数出まわる。	28歳
1916年 (大正5年)	7月 「ゴンドラの唄」楽譜出版。	詩人の相馬御風、故郷の糸魚川に戻る。	29歳
1917年 (大正6年)	6月 尋常小学校の教員をしていた江南敏子と結婚する。 10月 「萱間三平」のペンネームで「生ける屍」の劇中歌「さすらいの唄」を作曲する。	芸術座第9回公演、トルストイ作「生ける屍」上演。 抱月『早稲田文学』で民衆芸術について執筆する。 舞踏家の藤間静枝、新舞踊の会、藤蔭会の公演を始める。	30歳
1918年 (大正7年)	このころ東京府下代々幡村代々木160(現・渋谷区)に移る。 9月 「沈鐘」の劇中歌「森の娘」を作曲する。 11月 「緑の朝」の劇中歌「緑の朝の唄」を作曲する。	児童雑誌『赤い鳥』創刊。 芸術座、松竹提携第1回公演、ハウプトマン作「沈鐘」上演。 芸術座、松竹提携第2回公演、ダヌンチオ作「緑の朝」上演。 島村抱月死去。 第一次世界大戦、終戦。	31歳
1919年 (大正8年)	詩人・作詞家の野口雨情、日本蓄音器商会の森垣二郎と民謡の旅に出る。 1月 「カルメン」の劇中歌「恋の鳥」「煙草のめのめ」「酒場の唄」「別れの唄」を作曲する。 11月 初めての童謡「美しい「お早う!」」を作曲し、児童雑誌『小学女生』に掲載。	芸術座、松竹提携第3回公演、メリメ作「カルメン」上演。 松井須磨子死去。 芸術座解散する。 児童雑誌『金の船』創刊。	32歳
1920年 (大正9年)	『金の船』に童謡を掲載し始める。	「ゴンドラの唄」が流行する。	33歳
1921年 (大正10年)	「船頭小唄」の楽譜を出版。 **10月 東京府下豊多摩郡中野町大字中野3508番地(現・中野区中央5丁目38番地)に自宅を新築して移る。**	「船頭小唄」流行する。 藤間静枝、藤蔭会で「思凡」を発表し、好評を得る。	34歳
1922年 (大正11年)	児童雑誌『コドモノクニ』に童謡を掲載し始める。 10月 『童謡小曲』第1集を出版。 11月 浅草千束尋常小学校を退職する。	児童雑誌『コドモノクニ』創刊。	35歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1923年 (大正12年)	新民謡第1号の「須坂小唄」を作曲する。 藤間静枝の協力を得て、東京帝国ホテル演芸場で第1回作品発表会を開催する。 6月 桑原卯郎を養子とする。 9月 佐渡島に公演旅行中、関東大震災の報を受けるが、自宅は無事だった。 東京府立第二中学校(現・都立立川高等学校)の教師となる。	「船頭小唄」松竹で映画化される。 関東大震災、発生。	36歳
1924年 (大正13年)	9月 府立第二中学校退職。作曲一筋に進むことになる。 10月 新潟県長岡市に歌手の佐藤千夜子、藤間静枝と旅をし、「歌と舞踊の会」を開く。	映画「籠の鳥」が上映され、以後、小唄映画の製作が流行する。	37歳
1925年 (大正14年)	7月 東京放送局のラジオ番組「童謡いろいろ」に出演し、自作童謡を初めて放送する。 **8月 自宅にラジオセットを備え付ける。** 11月 朝鮮京城日報社の招きで、釜山・京城に公演旅行。 大日本作曲家組合が結成され、参加する。	東京放送局ラジオ放送開始。 日本作歌者協会結成。 治安維持法公布。	38歳
1926年 (大正15年/ 昭和1年)	2月 新潟県高田市(現・上越市)で、スキー新民謡「スキーぶし・さらさらと」などの発表会に出演する。 3月 東京放送局で新作民謡を佐藤千夜子と放送。 5月 再度朝鮮に行き、旅順、大連を旅する。 **8月 次兄市川隆太死去。** **自宅2階の増築が完成する。**	東京、大阪、名古屋の放送局の合同で日本放送協会(NHK)設立。 大正天皇崩御。	39歳
1927年 (昭和2年)	4月 野口雨情、佐藤千夜子、歌手の平井英子と台湾へ旅行する。 8月 鳥取県三朝の「三朝小唄」を作曲し、発表会に出演する。 弟哲造と一緒に郷里の日野小学校にピアノを寄贈する。 11月 長野県下高井郡中野町(現・中野市)の「中野小唄」を作曲し、発表会に出演する。	オペラ歌手の藤原義江、アメリカで「出船の港」をビクターレコードに吹込む。 日本ビクター蓄音機会社設立。 「出船の港」が流行する。	40歳
1928年 (昭和3年)	**5月 東京府豊多摩郡本郷尋常小学校(現・中野本郷小学校)校歌を作曲する(西條八十作詞)** 7月 日本ビクター蓄音機株式会社と専属契約を結び、主な作品を順次吹込む。 8月 長野県戸倉温泉のため「千曲小唄」を作曲し、発表会に出演する。 大阪放送局で童謡を放送し、家族を連れて関西旅行をする。 9月 東京市主催「民謡の夕」を日比谷公園で開催する。 浜口雄幸首相の依頼で、輸入超過に対する政策を普及するための「緊縮小唄」(西條八十作詞)を作曲する。 11月 郷里の中野小学校にピアノを寄贈する。 天龍峡の依頼で「龍峡小唄」を作曲する。	「波浮の港」「鉾をおさめて」が流行する。 時局啓蒙のための歌謡の流れが「緊縮小唄」を皮切りに始まる。 「大日本作曲家組合」が「日本作曲家協会」に改称	41歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1929年 (昭和4年)	新潟県十日町などの新民謡を各地に旅して作曲する。 6月 小説『東京行進曲』の映画化のため、主題歌を作曲する。 **中野高等女学校(現・宝仙学園中学・高等学校)の委嘱で「いろはうた」を作曲する。**	「東京行進曲」が流行し、レコードが25万枚売れる。 西條八十、ビクター専属となる。	42歳
1930年 (昭和5年)	「東京行進曲」「三朝小唄」の無断使用レコードが横行し、ビクターと協力して訴訟を起こす。 姪の藤井梶子を養女とする。 7月 『中山晋平作曲全集・民謡篇』を出版。 8月 函館市で「童謡・民謡・舞踊の会」に出演する。 11月 静岡県熱海の「熱海節」のほか、神戸、高松、岡山などの新民謡を作曲する。	帝都復興祭挙行される。 佐藤千夜子、イタリアへ留学する。 作曲家組合、大日本作曲家協会と改称。	43歳
1931年 (昭和6年)	九州各地に新作発表のため旅行する。 5月 福島県飯坂に行き「飯坂小唄」を作曲する。 **9月 東京市中野町本町通5丁目14番地(現・中野区中央4丁目6番地)に新居を建築し、移る。**	東京音楽学校に作曲科が設置される。 芸者歌手の勝太郎(代表曲は「東京音頭」)市丸(代表曲は「天龍下れば」)歌謡界にデビューする。 満州事変発生。	44歳
1932年 (昭和7年)	「丸の内音頭」をはじめ、音頭ものの作曲を始める。 『幼稚園』に作曲掲載を始める。	満州国建国宣言。 五・一五事件発生。 児童雑誌『幼稚園』創刊。	45歳
1933年 (昭和8年)	箱根仙石原に別荘を建てる。 7月 晋平が世話をしていた芸者で歌手の喜代三、東京に移り住む。 9月 梶子、童謡歌手としてビクターと専属契約を結ぶ。	「東京音頭」の歌と盆踊り、全国的に流行する。 日本、国際連盟脱退。 皇太子生誕。	46歳
1934年 (昭和9年)	長崎、秋田、軽井沢、岡山などの新民謡制作のため各地へ旅行する。 **感応幼稚園(現・宝仙学園幼稚園)の園歌を作曲する。(西條八十作詞)**	竹久夢二死去。	47歳
1935年 (昭和10年)	2月 熱海に別荘を建てる。 **7月** 「作曲生活20年記念音楽会」がビクター主催で東京宝塚劇場で開かれる。 **作曲生活20年の記念写真を自宅の庭で撮影する。**	西條八十、ビクターからコロムビアに移籍する。	48歳
1936年 (昭和11年)	4月 卯郎、東京大学入学。 10月 妻 敏子死去。 **11月 中野区児童芸術研究会設立され、参加する。**	二・二六事件発生。 児童文学者の鈴木三重吉死去。 『赤い鳥』終刊。	49歳
1937年 (昭和12年)	4月 朝日新聞社所有の航空機「神風号」が当時の世界記録で日本からロンドンへの飛行を成功させる。それに伴い、関係の歌を作曲する。 12月 喜代三(中山嘉子)と結婚する。	日中戦争始まる。	50歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1938年 (昭和13年)	5月 兄明孝死去。 9月『中山晋平新作童謡作曲集』出版。	従軍詩曲部隊(西條八十、古関裕而)出発。 国家総動員法公布。	51歳
1939年 (昭和14年)	2月 日本ビクター株式会社文芸部の相談役を委嘱される。 **4月 梶子、中野高等女学校に入学する。(現・宝仙学園中学・高等学校)** 11月 大日本音楽著作権協会が設立され、監事となる。	第二次世界大戦勃発。	52歳
1940年 (昭和15年)	卯郎、日本放送協会(NHK)に就職する。 10月 大日本作曲家協会解散。	皇紀2600年奉祝芸能祭開催。 大政翼賛会発会。	53歳
1941年 (昭和16年)	「オスナバアソビ」(清水かつら/詞)が文部大臣賞受賞。 9月 日本音楽文化協会が創立され、理事となる。 12月 少国民文化協会の参与となる。	小学校、国民学校となる。	54歳
1942年 (昭和17年)	文部省検定音楽教科書の作曲を初めて受ける。 5月 日本蓄音機レコード文化協会の参与となる。 7月 日本演奏家協会理事長となる。	北原白秋死去。	55歳
1943年 (昭和18年)	**4月 梶子、女学校在学中、女子挺身隊として近くの工場作業に従事する。** 5月 卯郎、結婚する。 12月 日本音楽著作権協会の理事となる。 熱海の家に疎開し、居住地移転の届出をする。	内務省、情報局が米英楽曲の演奏禁止を公布。	56歳
1944年 (昭和19年)	3月 日本芸能社参与に就任する。 5月 日本音楽文化協会理事長辞任。 **7月 中野区鷺宮の武蔵野文化会にて日本文化指導所が発足され、参加する。** 9月 日本音楽著作権協会理事長となる。 11月 日本音楽文化協会の副会長となる。 梶子、晋平の郷里に疎開する。	日本音楽文化協会、米国型楽器編成の演奏を禁止。	57歳
1945年 (昭和20年)	熱海で畑仕事を始める。 **5月** 卯郎に召集令状が届く。 **東京が空襲に見舞われ中野も随所焦土となるが、自宅は無事だった。** 9月 日本音楽文化協会解散。 10月 卯郎と郷里に行き、疎開中の品物を整理する。	野口雨情死去。 ビクター築地スタジオ、空襲で焼失する。 第二次世界大戦終戦。 日本ビクター生産再開する。	58歳
1946年 (昭和21年)	**中野区の自宅を整理し、売却を進める。**	2月 NHKのラジオ英語会話が始まり、「証城寺の狸囃子」の旋律に英語の替歌をつけたテーマソングが使用される。	59歳
1947年 (昭和22年)	松竹、東宝が製作した松井須磨子を題材にした映画のため、それぞれに劇中歌を作る。	3月 教育基本法公布。 5月 日本国憲法施行。	60歳

西暦(和暦)	事柄	関連事項・世相	年齢
1948年 (昭和23年)	全音楽譜出版社と全ての自作作品を出版契約する。 5月 日本音楽著作権協会会長となる。 8月 卯郎、玉川奥沢に移り、晋平の上京の時の宿泊先となる。	喜代三に教えを受けた芸者歌手の喜久丸、ビクター歌手となる。	61歳
1949年 (昭和24年)	児童雑誌『幼稚園』に再び童謡の作曲を掲載し始める。		62歳
1950年 (昭和25年)	3月 三重県家城に新民謡作曲のため旅行する。踊りの振り付けも行う。 4月 熱海市で大火、晋平宅は無事だった。 6月 梶子、東京の卯郎宅に移る。 7月 日本民謡協会理事に就任する。 10月 文部省から著作権法改正案起草審議委員を委嘱される。	5月 相馬御風死去。	63歳
1951年 (昭和26年)	長野県諏訪市ほかを訪れ、新民謡を作曲する。 11月 梶子、結婚する。	日米安保条約調印。	64歳
1952年 (昭和27年)	1月 NHK第二回紅白歌合戦に審査委員長として出演。 3月 台東区千束小学校校歌を作曲する。 熱海の畑仕事が地主の都合で取り止めとなる。 9月 NHK「懐かしのメロディー」に出演し、自作を自ら解説する。 10月 日本民謡協会第3回大会のため仙台に行き、作曲した協会会歌を発表し、「民謡文化賞」を受賞する。 11月 郷里近くの柳原(現・飯山市)に行き村歌ほかを作曲する。 東京、井の頭公園に野口雨情の記念碑が完成し、雨情会会長として除幕式を挙行する。 12月 黒澤明監督の映画「生きる」を鑑賞する。 東京で発病、熱海に戻り加療を始める。 30日、国立熱海病院で、すい臓炎のため死去。	著作権協会の役員であり、音楽学校以来の友人である作曲家・ヴァイオリニストの杉山長谷夫と、作曲家の弘田龍太郎死去。 黒澤明監督の映画「生きる」劇中で主人公が「ゴンドラの唄」を歌う場面が評判となる。	65歳
1953年 (昭和28年)	1月 日本ビクター株式会社社葬として築地本願寺で葬儀執行される。 2月 昭和27年度芸能選奨を受ける。	NHKがテレビの本放送を開始する。	

参考資料：

『信州人物風土記・近代を拓く17　中山晋平』宮坂勝彦/編，銀河書房，1987年（281.5/シ/17）

『カチューシャの唄よ、永遠に』斉藤武雄/[ほか]著，郷土出版社，1996年（762.1/ナ）

『中山晋平作曲目録年譜』　中山卯郎/編，豆ノ樹社，1980年（762.1/ナ）

『唄の旅人中山晋平』和田登/著，岩波書店，2010年（762.1/ナ）

主 要 曲 年 表

・作品の選定は、中山晋平記念館HP、『唄の旅人中山晋平』（前述）、『カチューシャの唄よ、永遠に』（前述）、『中山晋平作曲目録・年譜』（前述）等を参考にしました。新民謡･流行歌、童謡の2種類に分け、流行歌･新民謡は青、**童謡は赤の太字**で表示しています。
・曲目の配列は作成年代順としましたが、発表年月が確認できない場合は、初めて掲載された出版物、初めて出版された楽譜、初めて作られたレコードの発売年月のうち、最も古いものを基準としました。
・曲名の表記は『中山晋平作曲目録・年譜』を基準としました。

西暦（和暦）	代表曲（）内は作詞者	年齢
1914年 （大正3年）	「カチューシャの唄」（島村抱月･相馬御風）	27歳
1915年 （大正4年）	「ゴンドラの唄」（吉井勇）	28歳
1916年 （大正5年）	「春の雨」（相馬御風）	29歳
1917年 （大正6年）	「さすらいの唄」（北原白秋）「にくいあん畜生」（北原白秋） 「今度生まれたら」（北原白秋）	30歳
1918年 （大正7年）	「森の娘」（島村抱月･楠山正雄） 「緑の朝の唄」（小山内薫･長田秀雄）	31歳
1919年 （大正8年）	「煙草のめのめ」（北原白秋）「酒場の唄」（北原白秋） 「恋の鳥」（北原白秋）「別れの唄」（北原白秋） **「美しい「お早う!」」（相馬御風）**	32歳
1920年 （大正9年）	「月の出の唄」（野口雨情）「雀をどり」（北原白秋） **「鼬の嫁入り」（野口雨情）**	33歳
1921年 （大正10年）	「船頭小唄」（野口雨情）「池の真菰に」（北原白秋） **「てるてる坊主」（浅原鏡村）「夏の雲」（相馬御風）** **「揺籠のうた」（北原白秋）**	34歳
1922年 （大正11年）	**「里ごころ」（北原白秋）「砂山」（北原白秋）** **「みぞれ」（浜田広介）「からくり」（海野厚）** **「シャボン玉」（野口雨情）「黄金むし」（野口雨情）**	35歳
1923年 （大正12年）	「恋は命よ」（野口雨情）「旅人の唄」（野口雨情） 「須坂小唄」（野口雨情） **「南京玉」（西村酔香）「雛祭り」（海野厚）「鳥籠」（百田宗治）** **「肩たたき」（西條八十）「背くらべ」（海野厚）**	36歳

西暦(和暦)	代表曲()内は作詞者	年齢
1924年 (大正13年)	「真間の手古奈」(小寺融吉)「青い芒」(野口雨情) 「波浮の港」(野口雨情)「あの町この町」(野口雨情) 「木の葉のお船」(野口雨情)「兎のダンス」(野口雨情) 「夕立」(富原義徳)「雨降りお月」(野口雨情)	37歳
1925年 (大正14年)	「紅屋の娘」(野口雨情)「出船の港」(時雨音羽) 「空飛ぶ鳥」(野口雨情) 「こんこん小狐」(浜田広介)「鶯の夢」(野口雨情) 「証城寺の狸囃子」(野口雨情)「たあんきぽうんき」(北原白秋) 「あめふり」(北原白秋)	38歳
1926年 (大正15年/昭和1年)	「鉾をおさめて」(時雨音羽) 「スキーぶし　さらさらと」(相馬御風) 「あがり目さがり目」(水谷まさる)「日和傘」(久保田宵二) 「ねんねのうた」(水谷まさる)	39歳
1927年 (昭和2年)	「三朝小唄」(野口雨情)「中野小唄」(野口雨情) 「元日」(和田古江)「雀」(野口雨情)「笛の音」(浜田広介) 「椿」(永井花水)「チュウリップ兵隊」(北原白秋)	40歳
1928年 (昭和3年)	「マノン・レスコオの唄」(西條八十)「当世銀座節」(西條八十) 「飯山小唄」(高野辰之)「望月小唄」(甘利秀男) 「千曲小唄」(正木不如丘)「鎮西小唄」(野口雨情) 「諏訪小唄」(伊藤松雄)「大町小唄」(伊藤松雄) 「龍峡小唄」(白鳥省吾)「緊縮小唄」(西條八十) 「九月の歌」(西條八十)「南京言葉」(野口雨情) 「兵隊ゴッコ」(酒井良夫)「ふきあげる」(北原白秋)	41歳
1929年 (昭和4年)	「東京行進曲」(西條八十)「愛して頂戴」(西條八十) 「不壊の白珠」(西條八十)「母の歌」(鶴見祐輔) 「浅間節」(野口雨情)「松本民謡」(野口雨情ほか) 「上州小唄」(野口雨情)「十日町小唄(サッテモ節)」(永井白涓) 「毬と殿さま」(西條八十)「動物園で」(西條八十) 「かくれんぼ」(永井花水)「牧場の羊の歌」(西條八十) 「蛙(かわず)の夜まはり」(野口雨情)「夕やけこやけ」(永井花水) 「霜夜の鼬」(野口雨情)	42歳
1930年 (昭和5年)	「唐人お吉の唄・黒船篇」(西條八十)「この太陽」(西條八十) 「新東京行進曲」(西條八十)「野沢温泉小唄」(時雨音羽) 「琵琶湖シャンソン」(西條八十)「鴨川小唄」(長田幹彦)「熱海節」(西條八十) 「ころがりお月さん」(西条八十)「手の鳴る方へ」(野口雨情) 「朝の鈴」(永井花水)「人形のお顔」(野口雨情) 「汽車汽車走れ」(北原白秋)「キューピーピーちゃん」(野口雨情)	43歳

西暦(和暦)	代表曲()内は作詞者	年齢
1931年 (昭和6年)	「大京城行進曲」(沢村正) 「秋田土崎湊小唄」(西條八十)「飯坂小唄」(西條八十) 「別府まっちょる節」(西條八十) **「おみやげ三つ」(西條八十)**	44歳
1932年 (昭和7年)	「肉弾三勇士」(長田幹彦)「銀座の柳」(西條八十) 「伊豆の踊子」(長田幹彦)「丸の内音頭」(西條八十) **「てふてふの町」(佐藤義美)「春がきたきた」(西條八十)**	45歳
1933年 (昭和8年)	「カナカの娘」(安藤盛)「燃える御神火」(西條八十) 「万歳音頭」(西條八十)「大島おけさ」(西條八十) 「東京音頭」(西條八十)「天龍下れば」(長田幹彦) 「雪の原山」(殿内芳香) **「朝の海」(西條八十)「独木舟(まるきぶね)」(西條八十)** **「お団子ころがれ」(西條八十)「坊ちゃんいくつ」(西條八十)** **「皇太子さまお生れなった」(北原白秋)**	46歳
1934年 (昭和9年)	「さくら音頭」(佐伯孝夫)「山の唄」(北原白秋) 「伊豆長岡あやめ音頭」(西條八十) 「北信濃音頭」(時雨音羽)「丹那音頭」(長田幹彦) 「軽井沢音頭」(西條八十)	47歳
1935年 (昭和10年)	「湯田中ぶし」(西條八十)**「あひるのせんたく」(佐伯孝夫)**	48歳
1936年 (昭和11年)	「母恋し」(西條八十)「起てよ若人」(末弘厳太郎)	49歳
1937年 (昭和12年)	「神風だから」(豊坂のぼる)「利鎌の光」(相馬御風)	50歳
1938年 (昭和13年)	「日章旗の下に」(佐藤春夫)**「一休さん」(若杉雄三郎)**	51歳
1939年 (昭和14年)	「満州開拓の歌」(本間一咲) 「青少年義勇隊の歌」(鳥越強)	52歳
1940年 (昭和15年)	「建国音頭」(若杉雄三郎) **「今日は一日の日」(北原白秋)「オスナバアソビ」(清水かつら)**	53歳
1941年 (昭和16年)	「火の用心」(相馬御風)「瑞穂踊り」(岡崎淑郎) **「雨ふり」(松永みやを)**	54歳
1942年 (昭和17年)	「われら勤労奉国隊」(藤瀬雅夫)**「田植」(井上赳)**	55歳
1943年 (昭和18年)	「沖に帆あげて」(川路柳虹)	56歳

西暦(和暦)	代表曲()内は作詞者	年齢
1944年 (昭和19年)	「勝ち抜き太鼓」(岡本一平)	57歳
1945年 (昭和20年)		58歳
1946年 (昭和21年)	「花咲く銀座」(西條八十)	59歳
1947年 (昭和22年)	「憲法音頭」(サトウハチロー)「信濃のばら」(佐伯孝夫)	60歳
1948年 (昭和23年)		61歳
1949年 (昭和24年)	「新平和音頭」(小口正夫)「西山小唄」(原山里志)	62歳
1950年 (昭和25年)	「家城おどり」(和田正次郎)「お花見チョンキナ」(小野金次郎) 「辰野音頭」(谷川ふゆ芽)「ほたる小唄」(小浜梅窓)	63歳
1951年 (昭和26年)	「お諏訪節」(北原義張)	64歳
1952年 (昭和27年)	「柳原音頭」(稲葉晃三)	65歳

展 示 風 景

◂ 壁面展示スペース

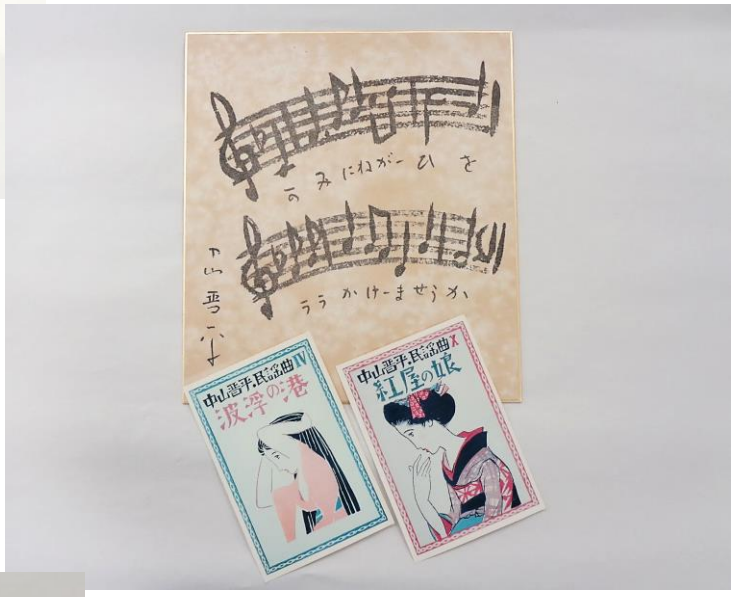
ガラスケース内展示 ▸

◂ ポスター

展 示 物

◂ 中山晋平之酒　没後 70 周年記念酒
志賀泉酒造株式会社
現代表･中山治氏は中山晋平の孫にあたる。

個人蔵



直筆色紙レプリカ ▸
個人蔵

▲ 『昭和レトロ ビクターミュージックブック
中山晋平童謡集１』

個人蔵

◂ 中央図書館所蔵資料
『信濃教育』第 947 号 中山晋平の人と業績
（910.268/ナカ）

『童謡小曲』第 1～3 集 山野楽器店 ▸
提供：東京都立多摩図書館

◂ 中央図書館所蔵ＣＤ
右：『中山晋平の童謡』（P06/3366）
左：『中山晋平の流行歌』（P09/2895）

第19回　中野区ゆかりの著作者紹介展示　中山晋平ブックリスト

請求記号のないものは未所蔵資料

中山晋平に関する資料

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
童謡小曲　全3集	中山　晋平／曲・編輯	山野楽器店	1922-23	
信濃教育　第947号　中山晋平の人と業績		信濃教育会	1965	910.268/ナカ
秋田雨雀日記　第1巻	秋田　雨雀／著	未来社	1965	915.6/アキ/1
抱月、須磨子の恋愛と芸術：中山晋平ノートによる	小林キジ／著	月刊しなの	1969	
中野区史　昭和資料編　1	中野区／編	中野区	1971	213.6/ナ/Ｓ-1
写真集　満蒙開拓青少年義勇軍	全国拓友協議会／編	家の光協会	1975	222.5/マ
昭和流行歌史　別冊1億人の昭和史		毎日新聞社	1977	767.8/シ
日本洋楽外史	野村　光一／[ほか]著	ラジオ技術社	1978	762.1/ニ
宝仙学園五十年史	宝仙学園５０年史編集委員会／編	宝仙学園	1978	J10/Ａ
本郷　中野区立中野本郷小学校創立５０周年記念誌	中野区立中野本郷小学校／編	中野区	1978	J8/Ａ
雑学歌謡昭和史	西沢　爽／著	毎日新聞社	1980	767.8/ニ
中山晋平作品目録・年譜	中山　卯郎／著	豆ノ樹社	1980	762.1/ナ
日本人の自伝　16	正宗　白鳥／著、広津　和郎／著	平凡社	1981	281.0/ニ/16
いつも歌謡曲があった	雑喉　潤／著	新潮社	1983	767.8/ザ
先駆けるものたちの系譜　黙阿弥・逍遙・抱月・須磨子・晋平	河竹　登志夫／著	冬青社	1985	
日本の洋楽　1	大森　盛太郎／著	新門出版社	1986	762.1/ニ/1
流行歌と映画でみる昭和時代　全2冊	遠藤　憲昭／編	国書刊行会	1986	210.7/エ
上野奏楽堂物語	東京新聞出版局／編	東京新聞出版局	1987	760.6/ウ
信州人物風土記・近代を拓く　17　中山晋平	宮坂　勝彦／編	銀河書房	1987	281.5/シ/17
古川ロッパ昭和日記　戦前篇	古川　ロッパ／著	晶文社	1987	778/フ/1
満蒙開拓青少年義勇軍	桜本　富雄／著	青木書店	1987	334.4/サ
中山晋平　こころの歌と生涯　生誕百周年記念保存版		北信ローカル社	1987	Q71/Ａ
晋平節考	畑　守人／著	北信ローカル社	1987	
ふるさとの山河を歌の心に 時をこえてうたいつがれる歌の数々・作曲家中山晋平	日野　多香子／作	PHP研究所	1988	913/ヒ・児童
思想としての東京	磯田　光一／著	国文社	1989	910.26/イ
大歌謡論	平岡　正明／著	筑摩書房	1989	767.8/ヒ
童謡唱歌名曲全集　第1～3巻、別冊	田村　虎蔵／ほか〕共編	名著出版	1989	767.7/ド
東京行進曲	斎藤　憐／著	而立書房	1991	912.6/サイ
はるかなる調べとともに　中山晋平記念館つれづれ	畑　守人／著	北信ローカル社出版センター	1992	
童謡　唱歌　童画100（別冊太陽）		平凡社	1993	767.7/コ
カムカム エヴリバディ　平川唯一と「カムカム英語」の時代	平川　洌／著	日本放送出版協会	1995	830.4/ヒ
歌のなかの東京	柴田　勝章／著	中央アート出版社	1996	767.8/シ
カチューシャの唄よ、永遠に	斉藤　武雄／[ほか]著	郷土出版社	1996	762.1/ナ
斎藤佐次郎・児童文学史	斎藤　佐次郎／著	金の星社	1996	909/サ
戦争と教育	山住　正己／著	岩波書店	1997	372.1/ヤ
山本茂実全集　第7巻　カチューシャ可愛や	山本　茂実	角川書店	1998	
カッタカタの唄　晋平、雨情の「須坂小唄」物語	茂木　真弘／著	随想舎	2000	767.5/ナ
「はやり歌」の考古学	倉田　喜弘／著	文芸春秋	2001	767.8/ク
「唱歌」という奇跡十二の物語	安田　寛／著	文芸春秋	2003	767.7/ヤ
この素晴らしき日本の歌たち	岡田　豊／著	論創社	2004	767.0/ナ
中山晋平伝	菊池　清麿／著	郷土出版社	2007	762.1/ナ
中山晋平歌の旅立ち	中山　晋平／[作曲]	ほおずき書籍	2007	767.0/ナ
音楽を動員せよ	戸ノ下　達也／著	青弓社	2008	762.1/ト
東京都中野区立小学校・中学校・幼稚園　伴奏譜付き・校歌・園歌集	平井滋／編	コーラス同好会男声上高田	2008	J13/Ａ
流行歌の誕生　「カチューシャの唄」とその時代	永嶺　重敏／著	吉川弘文館	2010	767.8/ナ
唄の旅人中山晋平	和田　登／著	岩波書店	2010	762.1/ナ
甦る『ゴンドラの唄』	相沢　直樹／著	新曜社	2012	767.8/ア
子どものための歌　2　中山晋平,成田為三作品集	森澤　郁夫／監修	創風社	2012	767.7/ナ
出船の港	NHK東京児童合唱団／編	河合楽器製作所・出版部	2013	767.0/ナ
ニッポン大音頭時代　「東京音頭」から始まる流行音楽のかたち	大石　始／著	河出書房新社	2015	767.8/オ
童謡・唱歌の世界	金田一　春彦／[著]	講談社	2015	767.7/ナ
昭和歌謡	長田　暁二／著	敬文舎	2017	767.8/オ
1933年を聴く	齋藤　桂／著	NTT出版	2017	762.1/サ
歌う大衆と関東大震災　「船頭小唄」「籠の鳥」はなぜ流行したのか	永嶺　重敏／著	青弓社	2019	767.8/ナ
近代日本の音楽百年　第2巻	細川　周平／著	岩波書店	2020	762.1/ホ/2
日本の流行歌	生明　俊雄／著	ミネルヴァ書房	2020	767.8/ア
龍峡小唄ものがたり	牧内　雪彦／著	文芸社	2020	289.1/マ

牛山茂

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
洋楽鑑賞の知識	牛山　充／著	京都印書館	1948	760.7/ウ
この人なり 宮城道雄伝	吉川　英史／著	新潮社	1962	768.1/ヨ
日本童謡史	藤田　圭雄／著	あかね書房	1971	767.7/フ
新聞集成大正編年史　大正11年度版 下		明治大正昭和新聞研究会	1987	210.6/シ/11-3
教科書に書かれなかった戦争　Part 16		梨の木舎	1994	210.7/キ/16

オルガンの文化史	赤井　励／著	青弓社	1995	763.3/ア
バレエに育てられて	牧　阿佐美／著	新書館	2009	769.9/マ

北原白秋

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
北原白秋	玉城　徹／著	読売新聞社	1975	911.52/キ
評伝北原白秋	藪田　義雄／著	玉川大学出版部	1978	911.5/キ
北原白秋（文芸読本）		河出書房新社	1980	911.52/キ
北原白秋（短歌シリーズ・人と作品9）	島田　修二／著	桜楓社	1982	911.16/キ
復刻叢書日本の児童文学理論　[第2期 - 2]緑の触覚	上　笙一郎／編	久山社	1987	909/フ/2-2
白秋全歌集　全3巻	北原　白秋／著	岩波書店	1990-91	911.16/キ
白秋全童謡集　全5巻	北原　白秋／著	岩波書店	1992-93	911.58/キ
赤い鳥小鳥	北原　白秋／著	岩崎書店	1997	911.0/キ
北原白秋の世界	河村　政敏／著	至文堂	1997	911.52/キ
白秋と茂吉	飯島　耕一／著	みすず書房	2003	911.52/キ

古賀政男

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
古賀政男芸術大観	宮本　旅人／著	新興楽譜出版社	1978	767.8/ミ
私の履歴書　文化人 12	日本経済新聞社／編	日本経済新聞社	1984	281/ワ/12
古賀政男　歌はわが友わが心	古賀　政男／著	日本図書センター	1999	767.8/コ
評伝・古賀政男	菊池　清麿／著	アテネ書房	2004	767.8/コ
夢人生を奏でて	古賀政男音楽文化振興財団／著	古賀政男音楽文化振興財団	2004	767.8/コ
悲歌　古賀政男の人生とメロディ	佐高　信／著	毎日新聞社	2005	767.8/コ
評伝古賀政男	菊池　清麿／著	彩流社	2015	767.8/コ
きみに応援歌(エール)を 古関裕而物語	大野　益弘／著	講談社	2020	762.1/オ・YA
自伝わが心の歌　新装版	古賀　政男／著	展望社	2020	767.8/コ

西条八十

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
復刻叢書日本の児童文学理論　[第1期 - 8]現代童謡講話	[上　笙一郎／編]	久山社	1987	909/フ/1-8
童謡唱歌名曲全集　第4巻	田村　虎蔵／ほか〕共編	名著出版	1989	767.7/ド/4
日本名作絵本　27　童謡	西条　八十／ほか詩	ＴＢＳブリタニカ	1993	767/サ/27・児童
西條八十全集　10	西條　八十／著	国書刊行会	1996	918.68/サイ/10
西条八十　唄の自叙伝	西条　八十／著	日本図書センター	1997	911.52/サ
西條八十全集　16	西條　八十／著	国書刊行会	2001	918.68/サイ/16
西條八十（中公叢書）	筒井　清忠／著	中央公論新社	2005	911.52/サ
西條八十全集　17	西條　八十／著	国書刊行会	2007	918.68/サイ/17
父・西條八十の横顔	西條　八束／著	風媒社	2011	911.52/サ
コドモノクニ名作選　Vol.4-[1]		ハースト婦人画報社	2011	051.8/コ/4-1
ジャズで踊ってリキュルで更けて	斎藤　憐／著	岩波書店	2004	

佐藤千夜子

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
昭和の流行歌物語　佐藤千夜子から笠置シズ子、美空ひばりへ	塩澤　実信／著	展望社	2011	767.8/シ
朝ドラの55年	NHKドラマ番組部／監修	NHK出版	2015	778.8/ア
都道府県別ご当地ソング大百科	合田　道人／著	全音楽譜出版社	2020	767.8/ゴ

時雨音羽

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
うたのいしぶみ　3	松尾　健司／著	ゆまにて	1977	911.6/マ/3
昭和流行歌の軌跡	池田　憲一／著	白馬出版	1985	767.8/イ
日本随筆紀行１　北海道	作品社編集部／編集	作品社	1986	915.68/ニ/1
童謡唱歌名曲全集　第５巻	田村　虎蔵／ほか〕共編	名著出版	1989	767.7/ド/5
無思想の思想　新装版	大宅　壮一／著	文芸春秋	1991	914.6/オオ
日本の名随筆　別巻63　芸談		作品社	1996	914.68/ニ/Ｂ-63
近代日本の音楽百年　第3巻	細川　周平／著	岩波書店	2020	762.1/ホ/3

島村抱月

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
島村抱月	尾崎　宏次／著	未来社	1965	775.1/オ
抱月全集　第5巻	島村　抱月／著	日本図書センター	1979	918.68/シマ/5
抱月のベル・エポック	岩佐　壮四郎／著	大修館書店	1998	910.268/シマ
日本人の手紙　第5巻	紀田　順一郎／監修	リブリオ出版	2004	281.0/ニ/5
ドラマチック・ロシアin JAPAN　4	長塚　英雄／責任編集	生活ジャーナル	2017	319.1/ド/4

新橋喜代三（中山嘉子）

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
青葉笙子歌の回想録	青葉　笙子／著	柘植書房	1995	767.8/ア
山中貞雄作品集	山中　貞雄／著	実業之日本社	1998	912.7/ヤマ
多情菩薩	中山　嘉子／著	大空社	1999	767.8/シ
評伝山中貞雄	千葉　伸夫／著	平凡社	1999	778.21/ヤ
百萬両の女喜代三	小野　公宇一／著	彩流社	2016	767.8/シ

相馬御風

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
明治文學全集　61　明治詩人集　2		筑摩書房	1975	918.6/メ/61
相馬御風の人と文学	紅野　敏郎／編	名著刊行会	1982	910.26/ソ
相馬御風とその妻	相馬　文子／著	青蛙房	1986	911.52/ソ
日本の名随筆　39　芸		作品社	1986	914.68/ニ/39
日本の名随筆　90　道		作品社	1990	914.68/ニ/90
黎明期の文学	相馬　御風／著	日本図書センター	1990	904/ソ
ふるさと文学館　第19巻		ぎょうせい	1994	918.6/フ/19
若き日の相馬御風	相馬　文子／著	三月書房	1995	911.52/ソ
日本の名随筆　別巻67　子供		作品社	1996	914.68/ニ/Ｂ-67
花の名随筆　2	大岡　信／監修	作品社	1999	470.4/ハ/2
良寛さま	相馬　御風／著	実業之日本社	2001	188.8/リ
文壇出世物語	新秋出版社文芸部／編	幻戯書房	2018	910.26/ブ

高野辰之

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
江戸文学史　上中下巻	高野　辰之／著	東京堂	1952-54	910.25/タ
うたのいしぶみ　2	松尾　健司／著	ゆまにて	1977	911.6/マ/2
日本歌謡集成　巻6	高野　辰之／編	東京堂出版	1980	911.6/ニ/6
はじめて出会う古典作品集　6	河添　房江／監修	光村教育図書	2010	918/ハ/6・児童
童謡えほん	萩原　昌好／編	あすなろ書房	2014	E/ドウ・児童
高野辰之と唱歌の時代	権藤　敦子／著	東京堂出版	2015	375.7/ゴ
わくわく　こども詩集	全国学校図書館協議会／編	童話屋	2019	911/ワ・児童

竹久夢二

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
竹久夢二（別冊太陽）		平凡社	1977	726.5/タ
子供之友原画集　1　竹久夢二		婦人之友社	1986	726.5/コ/1
夢二日記　全4巻	竹久　夢二／著	筑摩書房	1987	726.5/タ
アサヒグラフ別冊　第14巻第6号　竹久夢二		朝日新聞社	1988	720.8/ア/1-55
竹久夢二文学館　8	竹久　夢二／[著]	日本図書センター	1993	918.68/タケ/8
竹久夢二文学館　9	竹久　夢二／[著]	日本図書センター	1993	918.68/タケ/9
竹久夢二　夢と郷愁の詩人	秋山　清／[著]	紀伊国屋書店	1994	726.5/タ
竹久夢二「セノオ楽譜」表紙画大全集	竹久　夢二／[画]	国書刊行会	2009	726.5/タ
竹久夢二　大正モダン・デザインブック	石川　桂子／編	河出書房新社	2011	726.5/タ
竹久夢二の世界（別冊太陽）		平凡社	2014	726.5/タ
竹久夢二詩画集	竹久　夢二／[著]	岩波書店	2016	918.68/タケ
竹久夢二　望郷の山河	夢二郷土美術館／監修	ぎょうせい	1990	

野口雨情

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
続野口雨情詩集　船頭小唄	野口　雨情／著	弥生書房	1978	911.56/ノ/2
定本 野口雨情　第1巻	野口　雨情／著	未来社	1985	918.68/ノグ/1
定本 野口雨情　第2巻	野口　雨情／著	未来社	1986	918.68/ノグ/2
復刻叢書日本の児童文学理論　[第1期 - 7]童謡十講	[上　笙一郎／編]	久山社	1987	909/フ/1-7
雨情・こころの唄	野口　雨情／著	筑波書林	1989	911.56/ノ
野口雨情詩集	野口　雨情／著	弥生書房	1993	911.56/ノ
野口雨情詩と民謡の旅	東　道人／著	踏青社	1995	911.52/ノ
定本野口雨情　補巻	野口　雨情／著	未来社	1996	918.68/ノグ/H
野口雨情　詩と人と時代　新装版	野口　存弥／著	未来社	1996	911.52/ノ
野口雨情童謡の時代	東　道人／著	踏青社	1999	911.52/ノ
十五夜お月さん　野口雨情童謡選	野口　雨情／[著]	社会思想社	2002	911.58/ジ
郷愁と童心の詩人野口雨情伝	野口　不二子／著	講談社	2012	911.52/ノ

平井英子

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
日本ミュージカル事始め	清島　利典／著	刊行社	1982	775.3/キ
威風堂々うかれ昭和史	小松　左京／著	中央公論新社	2001	910.268/コマ
愛唱歌ものがたり（岩波現代文庫）	読売新聞文化部／著	岩波書店	2014	767.0/ヨ
童謡の百年	井手口　彰典／著	筑摩書房	2018	767.7/イ
童謡百年史	井上　英二／著	論創社	2018	767.7/イ

藤間静枝(藤陰静樹)

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
昭和不良伝　越境する女たち篇	斎藤　憐／著	岩波書店	1999	281.0/サ
荷風と静枝	塩浦　彰／著	洋々社	2007	910.268/ナガ
私の見た人（大人の本棚）	吉屋　信子／[著]	みすず書房	2010	914.6/ヨシ
明けゆく空	藤陰　静枝／著	藤陰会	1943	911.16/フ
荷風全集　別巻	永井　壮吉／著	岩波書店	2011	918.68/ナガ/B

藤原義江

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
十人百話　5	杉　道助／[ほか]著	毎日新聞社	1964	914.68/ジ/5
漂泊者のアリア	古川　薫／著	文芸春秋	1990	913.6/フル
ピンカートンの息子たち	斎藤　憐／著	岩波書店	2001	289.1/ク
黄昏のダンディズム	村松　友視／著	佼成出版社	2002	281.0/ム
レコードで辿る日本音楽界のパイオニアたち	野崎　正俊／著	ショパン	2009	762.1/ノ

松井須磨子

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
随筆　松井須磨子	川村　花菱／著	青蛙房	1968	772.1/カ
信州人物風土記・近代を拓く　1　松井須磨子	宮坂　勝彦／編	銀河書房	1986	281.5/シ/1
叢書『青鞜』の女たち　第18巻　牡丹刷毛	松井　須磨子	不二出版	1986	367/ソ/18
長谷川時雨作品集	長谷川　時雨／著	藤原書店	2009	918.68/ハセ

視聴覚資料

タイトル	著者名	種別	発売年	請求記号
てるてる坊主・證城寺の狸囃子　中山晋平の童謡	平井　英子ほか／歌	CD	1987	P06/3366
中山晋平の流行歌	中山　晋平／作曲	CD	1987	P09/2895
スター★デラックス	平井　英子／歌	CD	2014	P07/6050
昭和レトロ　ビクターミュージックブック　中山晋平童謡集１		ソノシート		

中山晋平の音楽を聴く

★国立国会図書館 歴史的音源 https://rekion.dl.ndl.go.jp/

国立国会図書館は、1900 年初頭から 1950 年頃までに国内で製造されたレコードなどの音源を、関連団体と協力してデジタル化しています。そのうち、著作権の保護期間が満了した音源は、インターネット上で公開されており、誰でも聞くことができます。

公開されているものの中から、中山晋平が作曲した曲をご紹介します。印刷されている QR コードをスマートフォンなどで読み込むと、ページにアクセスできます。

カチューシャの唄 https://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1334429

「復活」の劇中歌として作曲され、劇中では松井須磨子が歌いましたが、こちらでは佐藤千夜子が歌っているものを聞くことができます。晋平が作曲家として歩み始める切っ掛けとなった曲です。

ゴンドラの唄 https://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3575143

「その前夜」の劇中歌として作曲された曲です。松井須磨子が歌った当時の音源を聞くことができます。この曲は、後に黒澤明監督の映画『生きる』でも挿入歌として使われました。「いのち短し　恋せよ乙女」というフレーズだけご存知の方も多いかもしれません。

中野小唄 https://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3570301

中野とありますが、この中野は晋平の故郷長野県の中野市のこと。中野という地名に縁を感じていたのか記録には残っていませんが、晋平がこの小唄だけは大きな声で熱心に歌っていたと、平井英子が思い出として語っています。

あめふり/どんぐりころころ

https://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2915612

歌詞は無く、曲のみのバージョンです。1 度はどこかで聞いたことのある、懐かしいメロディーなのではないでしょうか。

★中山晋平記念館　中山晋平の作品紹介

https://www.city.nakano.nagano.jp/nakayamashinpei/2022012500031/

長野県中野市の中山晋平記念館ホームページでは、晋平が作曲した一部の曲のメロディー部分を試聴することができます。

協力者・協力機関一覧（五十音順・敬称略）

学校法人 宝仙学園
志賀泉酒造株式会社（長野県中野市）
竹久夢二美術館
東京都立多摩図書館
中野区立歴史民俗資料館
中山晋平記念館（静岡県熱海市）
中山晋平記念館（長野県中野市）

※冊子で使用している写真の二次利用はご遠慮ください。

第 19 回 中野区ゆかりの著作者紹介展示
作曲家・中山晋平
～中野で生まれた大衆歌謡～
発行年月日　2023 年 4 月 1 日
編集・発行　中野区立中央図書館

印刷番号　5 指中教図中第 39 号

所在地　〒164-0001　東京都中野区中野 2 丁目 9 番 7 号
TEL　03-5340-5070　FAX　03-5340-5090

企画・制作／指定管理者 ヴィアックス・紀伊國屋書店共同事業体

中野区立図書館

https://library.city.tokyo-nakano.lg.jp/